

関東地方における 最古級の石器群と狩猟具の展望

主として台形様石器を中心として

Prospects of the Old Stone Artifacts and Hunting Tools in the Kantō Area :
Focusing Mainly on Trapezoid Tools

白石浩之

SHIRAISHI Hiroyuki

はじめに

①台形様石器の研究史

②台形様石器の形態と基部調整尖頭石器

③台形様石器の製作技術

④台形様石器の石材と製作過程

⑤台形様石器の分類

⑥台形様石器の層位的出土例

⑦関東地方の台形様石器からみた東西日本の展望

⑧まとめ

おわりに

【論文要旨】

本稿は台形様石器の様相について検討した論稿である。このことについては佐藤宏之によって『台形様石器研究序論』が発表されており、該期の研究において始良 Tn 火山灰降灰以前の石器群の解明が期待された。その後 28 年が経過し、全国的に台形様石器を出土する遺跡が広がった。とりわけ関東地方では層位的にも型式学的にも対応可能になり、あわせて台形様石器の機能・用途について使用痕研究や実験研究等により深みを増しつつある。

筆者は該期の台形様石器について型式学的研究から見直そうと思う。

先行研究では台形様石器は横長剥片を主たる素材とする点が強調されていたが、縦長剥片を素材とした例も看過できない。またペン先形ナイフと称された基部調整尖頭石器は東日本に卓越し、九州地方は僅少の分布状況を呈している。先端が尖状という点、基部加工のナイフ状石器と台形様石器が相互に影響して独自に製作されたものであろう。

台形様石器は素材の切断を介して外形を作り出す。刃部の両縁は側縁加工と平坦剥離、とりわけ錯向剥離を顕著に用いる。このように形成された台形様石器の形態は 6 類に区分される。①水平刃で基部が尖基のもの。②水平刃で平基のもの。③水平刃で平基であるが、側縁が末広がりになり刃部と交わる部位が角状を呈すもの。④斜刃で尖基のもの。⑤斜刃で平基のもの。⑥縦長剥片の端部を切断して用いたもので構成される。

台形様石器は関東地方で相模野 B5 層や武蔵野 X 層下部まで遡り、立川ローム層において最古級を呈す。B4 層、X 層上部から IX 層は台形様石器が最も卓越し、I ～ V 類の台形様石器が認められる。その終焉は黒色帯層の相模野 B3 層・武蔵野 VII 層の時期で縦長剥片を切断によって分割し、側縁加工を施した VI 類の台形様石器が目立ってくる。北関東地方では台形様石器の石材が遺跡毎に差異があり、地域差的な様相を呈す。VII 層以降に卓越する二側縁加工を主体としたナイフ形石器文化期以前の台形様石器文化が広く発達するのである。

【キーワード】台形様石器、基部調整尖頭石器、ナイフ状石器、切断手法、平坦剥離、錯向剥離、型式学

はじめに

台形様石器は始良 Tn 火山灰降灰以前に製作された狩猟具の一つである。その年代は 36,000 ～ 32,000 cal BP 頃[中村 2014]に発達し、その初源は約 38,000 ～ 37,000 cal BP[工藤 2010・2012]まで遡る。

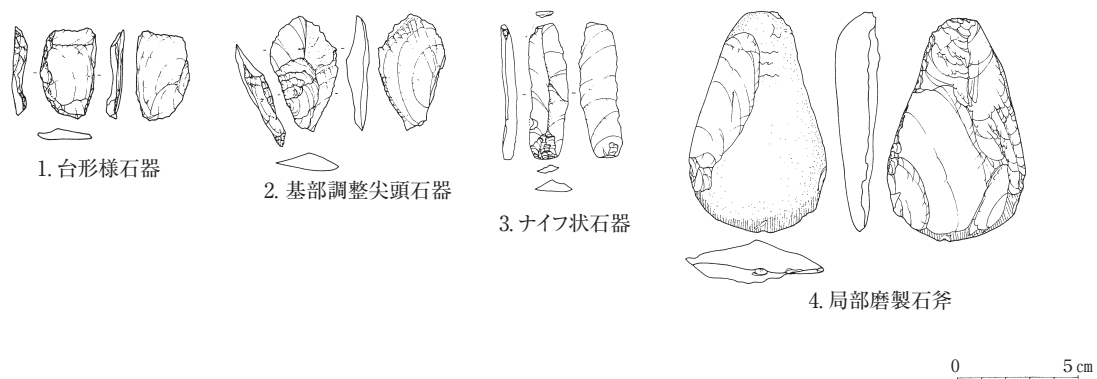
本稿はこの台形様石器の様相を具体的に把握するために、豊富な資料が蓄積されている関東地方の出土例を研究の対象とする。そのうえでまず第1点として台形様石器の先行研究について概観する。第2点として台形様石器とペン先形ナイフ（以下基部調整尖頭石器と呼称）を比較検討してその違いを述べる。第3点として台形様石器がどのように製作されているのか接合資料等を用いて検討し、素材の在り方について検討する。第4点として石材の点から検討しよう。そうした観点に立つて本論の中心的課題となる第5点で、新たな台形様石器の分類を提示する。そして第6点では分類された複数の台形様石器がどの層準から出土しているのかを検討しよう。終章の第7点では関東地方の台形様石器を見る中で東西日本の台形様石器石器文化を総括しようと思う。

①……………台形様石器の研究史

台形様石器は西南日本のみならず東北日本にも普遍的に分布する広域の石器である。とりわけ九州地方では長崎県百花台遺跡の層位的出土例からナイフ形石器と細石刃とに介在して台形石器（台形様石器も含む）が出土し、百花台型台形石器⁽¹⁾と命名され[和島・麻生 1963, 麻生 1965, 小田 1971, 麻生・白石 1976], 九州各地で出土するようになる。その後佐賀県唐津市枝去木分校入口遺跡で、枝去木型台形様石器[富樫・戸沢 1963, 杉原・戸沢 1971], 長崎県日ノ岳遺跡では百花台型台形石器とは異なる日ノ岳型台形石器が出土し[下川 1975, 白石 1978], 少なくとも時期の異なる台形石器の存在が予測されたのである。そのような中で熊本県曲野遺跡[江本 1984]から検出された台形様石器は始良 Tn 火山灰降灰以前の石器文化として明らかになったことで特筆すべき発掘事例と言える[江本 1984]。関東地方では東京都野川遺跡[小林・小田他 1971], 神奈川県月見野遺跡群[明治大学考古学研究室・月見野遺跡調査団 1969]の発掘調査以後[戸沢 1980]の武蔵野台地で、AT 降灰以前の X 層から VII 層、相模野台地では B4 層にかけて台形様石器が多く出土した。また北関東地方では群馬県岩宿遺跡第 I 文化層[杉原 1956]の黒色帯層に対比される下触牛伏遺跡第 II 文化層[岩崎 1956]他で出土し、下総台地では千葉県中山新田 I 遺跡[田村 1986]他で局部磨製石斧、ナイフ状石器、台形様石器などが出土したことにより（第1図）、九州地方と南関東地方ないし北関東地方の台形様石器の共通性が概ね理解されるようになってきた。

この点佐藤宏之[1988・1992]が執筆した「台形様石器研究序論」はいち早く関東地方における台形様石器の出土層位をもとにして「ナイフ形石器と石刃技法、台形様石器と横長・幅広剥片剥離技法の新旧伝統の二極構造を持ち、しかも両者が同一社会に共有された選択性を持つ技術であった可能性が高い」との見通しを立てたうえで台形様石器を以下のとおり3類に分類した(第2図・表1)。

I 類 形は梯形、三角形、鱗形、素材は横打剥片類、平面形態から2類に区分される。a 類は不整



第1図 千葉県中山新田I遺跡から出土した石器 [田村 1986]

三角形ないし鱗形，背稜構成はY字・逆Y字，背面剥離構成は求心状をなす。そのうちa-1は小形で多様な形態，石材は多様，a-2は大型，精製石器，石材は黒曜石が凌駕するものとした。

I類の横長剥片，幅広剥片の両端を切断，梯形の石器をb類とし，a-2類に対応したb-2類，両側縁を背部加工，b-3類はナイフ形石器で確立された背部加工とし，後出的様相とした。

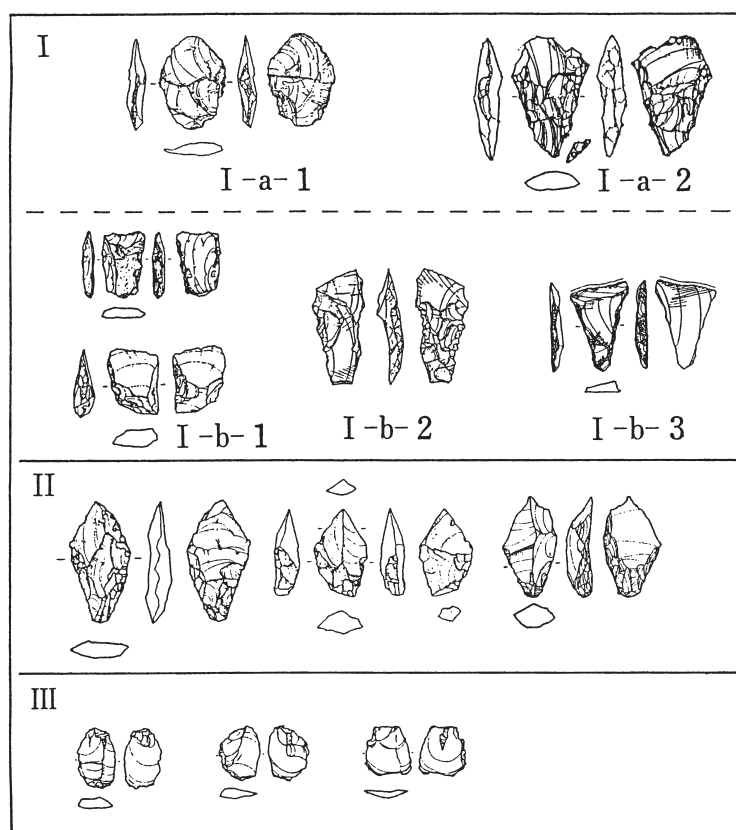
Ⅱ類 素材を縦位に使用，尖状端部を持つ剥片を利用，腹面調整により基部調整，ペン先形ナイフ形石器を相当させた。

Ⅲ類 寸詰まりの縦長剥片，拇指状求心・横剥剥片の端部にトリミング状の2次加工，ウワダイラ型台形石器，立野ヶ原ナイフ形石器を相当させた。

以上佐藤は台形様石器を3類に分類し，I類をaとbとし，それぞれ2細分した。また層位的にX層からⅦ層に至るまで武蔵野，下総，北関東，他地域に区分して編年試案を明示した。

このように佐藤の研究は台形様石器を型式細分し，それを編年学的に捉えたうえで地域性を解明しようとした点は始良 Tn 火山灰降灰以前の旧石器時代文化の様相を具体的に知るうえで大いに評価された。

もっとも佐藤 [1988]，田村隆 [1989]，安斎正人 [1997] は二極構造または二項モード論を展開している。モード論では縦長剥片を石刃モード，台形様石器を剥片モード [田村 前掲] としている。すなわち田村は佐藤達夫氏が区分した「剥片や石刃から作られた各種の片面打製の尖頭器」 [佐藤 1964] を石刃製背尖刃器，切出形石器を含めた剥片製台形様石器に大別して考慮している [田村 前掲]。安斎は佐藤や田村の視点を基にして，台形様・ナイフ形石器群の「二極構造」や「二項のモード」を生み出した構造について，次の点を指摘している。「前半期に限らず，その後も地域の社会生態的な環境に応じて，台形様石器が「台形石器」に進化したり（九州），台形様・ナイフ形石器が「国府型ナイフ形石器」に収斂したり（瀬戸内），台形様石器に替わってもっぱら「切出形石器」の表現形態をとったり（関東），また台形様石器がその姿を潜在させて（東北），あるいはナイフ形石器を代替したりして（北海道），後期旧石器時代を通して維持された」点を述べている [安斎 1997]。つまり横長剥片を基調とした台形様石器が地域の中でさまざまな横長剥片を主体とした切出形石器やナイフ形石器の形態と密接な関係を持ち，進化，収斂，表現形態，潜在，代替があったことを指摘した。地域性や発展過程を根本的に考慮した重要な指摘であった。



第2図 台形様石器の分類 [佐藤 1988]

表1 関東地方出土台形様石器の編年試案 [佐藤 1988]

期	層	武蔵野	下総	北関東	他
					野尻仲町 池のくるみ
	VII		○…………… (聖人塚VI)	(岩宿I) …… 後田・溜井	(西大曲)
III	VII Ⅸ	鈴木都道中 尾崎 嘉留多 鈴木小 鈴木都道南 多聞寺前 下里本邑……………		(善上) 武井I 藪塚 磯山 分郷八崎	○ 伊勢見山下 西原C 上萩森 七日市下層
II	Ⅸ Ⅹ	下里本邑 高井戸東 多聞寺前 三芳唐沢 西ノ台 鈴木都道中 はけうえ 武蔵台Ⅸ…………… 鈴木都道南 鈴木通路 武蔵台Ⅹa……………	獅々穴Ⅱ 御山 中山新田I…………… 権現後 遠山天ノ作 小金沢貝塚 腰巻 ○……………	下触牛伏 ○ 和田	地宗寺 溝口 曲野 野尻仲町○ ○
I	Ⅹ	多摩蘭坂 はけうえ 鈴木都道北 高井戸東	坊山 池花南	ヲサル山	

それでは台形様石器とはどのように理解されてきたのであろうか。台形様石器について他の先行する研究者の見解を紹介しておこう。

小田静夫〔前掲〕は台形石器の形式をⅠ台形石器、Ⅱa台形様石器、Ⅱb切出形石器に区分し、平行した刃部に対し、平行した直角に交わる二辺の刃潰しを原則とするものと考慮した。

藤原妃敏〔1983〕は台形石器と台形様石器の区分にあいまいさを残しているとしながらも、「全体の形状は台形を呈するが、横長剥片を素材とし、台形石器より大形の一群を指している」と捉えた。

須藤隆司〔1991〕は台形様石器を藪塚系ナイフ形石器とし、縁辺整形技術と面的整形技術によって平刃、斜刃を形成したものとした⁽²⁾。

群馬県三和工業団地Ⅰ遺跡から出土した豊富な台形様石器を分析した津島秀章〔1999〕は「剥片を素材とし、二次加工技術（刃つぶし状の二次加工、面的な平坦剥離、素材剥片の切断加工）によって台形様に整形された石器であって、その一部に素材の鋭い縁辺部（刃部）を残存させる石器」と理解した。

中川和哉〔2000〕は台形様石器を含む台形石器について「平面形が台形を呈し、石器の主軸に対して直交する刃部をもつ剥片石器で、刃部は第1次剥離によって得られた素材剥片の縁辺をあてる。素材や形状の違いから台形様石器と台形石器に区分されることもある。」と説明した。

田村隆〔2001〕は佐藤宏之の示すⅠ-a-1を除くⅠ類を台形石器と規定した。

竹岡俊樹〔2003〕は「加工された二側縁と、素材の刃部からなる台形を呈する石器」とし、その石器を特徴として台形石器文化として意義づけた。

以上台形様石器についての見解をみてきたが、当初横長剥片を台形様石器と規定する視点から調整加工や形態重視の視点へと変化している点は看過すべきではないであろう。したがって調整加工による形態決定から四辺形や台形、辺を上端に据えた三角形の範疇であることは明らかである。また台形様石器は水平刃の場合直角に近い四角形をなすが、ゆるやかな斜刃の場合は刃部と接する二辺の交わる角度は鋭角と鈍角となっており、その両辺はほぼ直角に底辺と交わっている。

今日日本列島の台形様石器は、西は九州地方から東は東北地方まで確実に広がりをもっている。北海道地方でも台形様石器が存在する可能性が早くから指摘されていた〔芹沢 1971〕。近年恵庭 a 火山灰（En-a）下位で出土した石器について佐藤宏之〔2003〕は積極的に台形様石器に相当させる研究を行い、今日では直江康雄〔2014〕もその立場をとっている。

かくて先行研究では見てきたように、台形様石器の定義は全て刃部が平刃ないしは緩やかな斜刃で構成され、尖頭部を形成するような所謂ベン先形ナイフ〔芹沢 1977〕は含まれていない。また佐藤は横長・幅広剥片剥離技術と台形様石器、石刃・縦長剥片剥離技術とナイフ形石器の二様の在り方を指摘し、とりわけ前者は佐藤の指摘する「前期旧石器時代」の技術的系譜と理解し、後者は後期旧石器時代の二極構造の中で捉えようとした。この点竹岡俊樹らによる所謂前期旧石器時代批判、それに基づく二極構造への批判がみられた〔竹岡 2003〕。また本稿の③で後述するように、横長剥片のみならず縦長剥片剥離を素材とした台形様石器が安定して製作されている点により、二様の結びつきは難しくなってきた。

他方台形様石器の研究は機能・用途論について具体的に探ろうとする研究が使用痕研究や実験考古学から見られるようになる。鹿又喜隆は岩手県上萩森遺跡〔鹿又 2005・2011〕や秋田県地蔵田遺

跡出土の台形様石器、基部調整尖頭石器についての使用状況を個体の分布を含めて検討した〔鹿又2011〕。また山岡拓也は静岡県土手上遺跡の台形様石器を観察し〔山岡2010〕、衝撃剥離痕〔御堂島1991・1993〕、微細衝撃線状痕〔佐野・傳田・大場2012〕等の使用痕研究を含めた欠損状態の観察を通して台形様石器が着柄されて使用されたものと捉えられた意義は大きい〔山岡2010〕。

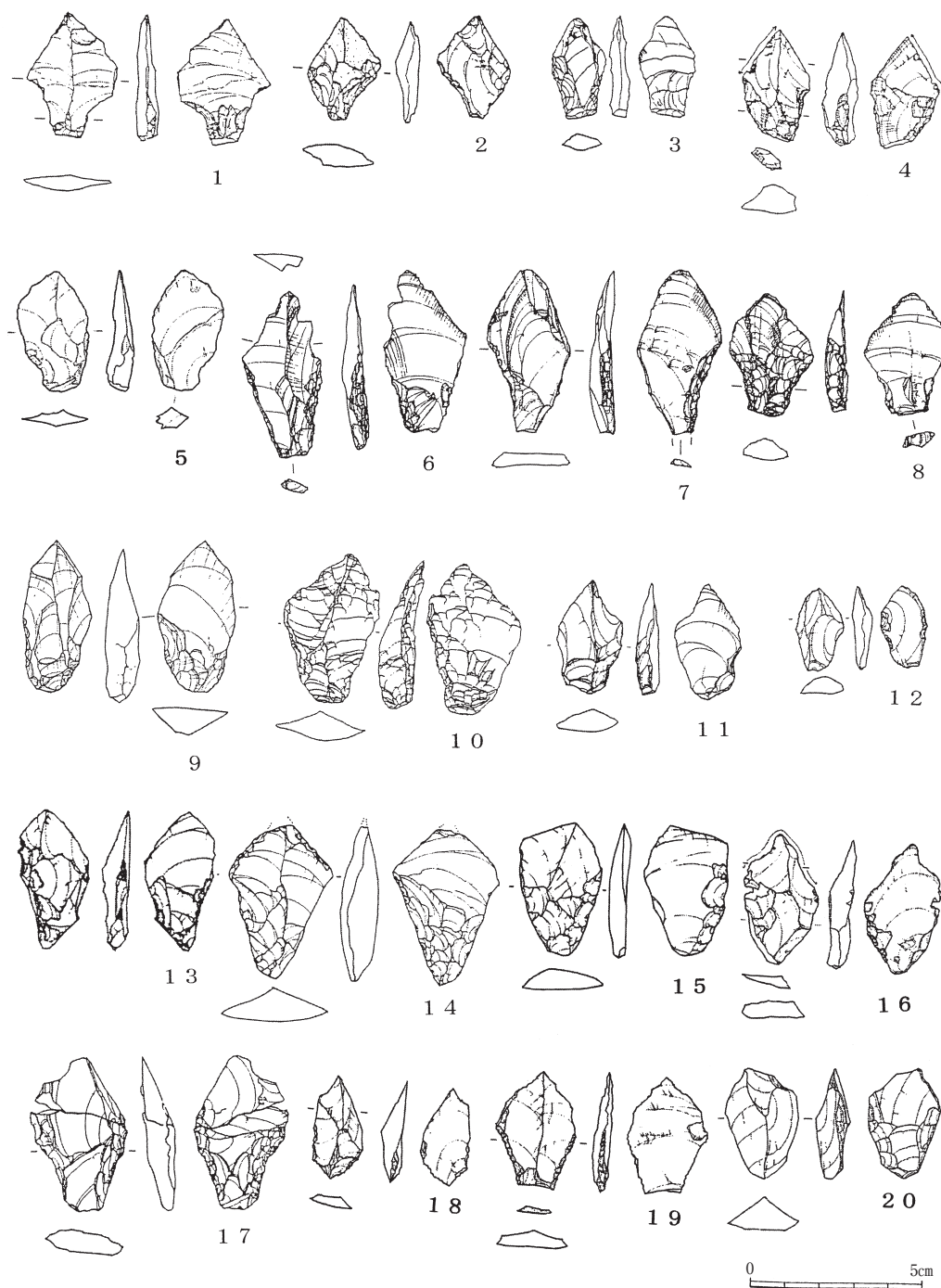
②……………台形様石器の形態と基部調整尖頭石器

佐藤〔1988〕の研究から28年を経たが今なお台形様石器の研究では看過できない論稿となっている。それは始良 Tn 火山灰降灰以前に台形様石器が主体的な石器群とした文化が確実に存在した点にある。ただし筆者は台形様石器の型式観は佐藤とは別の見方をしている。それは台形様石器Ⅰ類の1-a-1類とⅡ類に分類された台形様石器で、栃木県磯山遺跡で芹沢長介が指摘した「ベン先形ナイフ」〔芹沢1977〕を台形様石器に組み込んでいることである。「ベン先形ナイフ」の名前は固定化されたきらいがあるが、ナイフ形石器とも異なるし、台形様石器とも異質のものである。白石典之はこの石器を基部調整尖頭石器と命名したが、分郷八崎型ナイフ形石器の中で理解した〔白石典1987〕。筆者はこの石器を下記のとおり台形様石器とは異なる器種として分析した〔白石2011・2012〕。基部調整尖頭石器は器体の両側中位ないしやや上部に尖頭部と基部を結ぶ肩を有する特徴をなす。尖頭部は素材の稜線が交わる角を利用している。中には両側から細部加工を施した例もある。基部は円基、平基もあるが、尖基状を呈する形態が多くなり、中には両側から平坦な裏面基部加工を施している例もみられる（第3図）。対して台形様石器の形態は方形、逆台形、逆三角形が基本である。両側縁は左右対称形、左右非対称形があり、後者は尖基状になる例がある。また刃部は直刃を基本として水平刃ないし緩い斜刃を呈す。素材は盤状の石核や求心的な多方向からの剥離によって寸詰まりの剥片を生産して用いている点で台形様石器の素材と共通する例もあるが、基部調整尖頭石器は縦長剥片を多用し、基部を打面としている点が多い。また作出された寸詰まりの剥片素材が縦長ないし横長によって刃部や尖頭部の位置が決まるので、その点を考慮しながら調整加工を施して台形様石器や基部調整尖頭石器を作り出していたのであろう。後者の石器は分布の量的な多寡はあるが本州地方から九州地方にかけて認められる点を指摘した〔白石2011・2012〕。

③……………台形様石器の製作技術

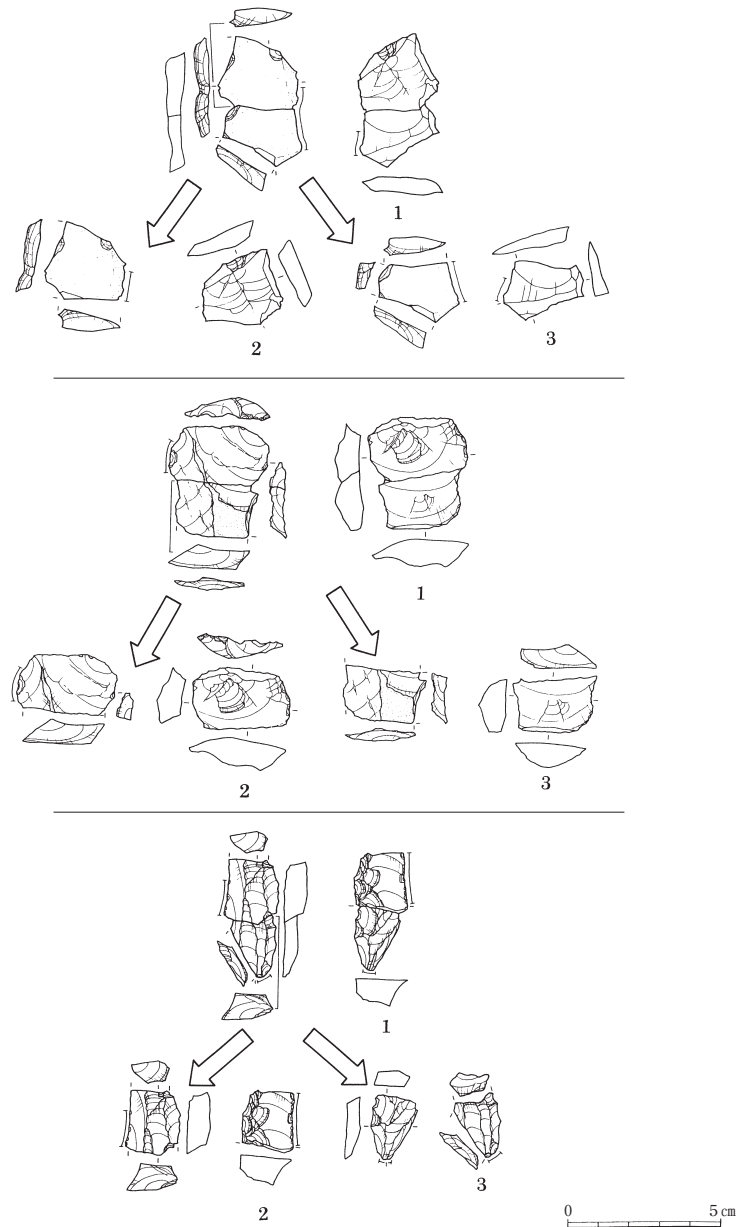
台形様石器は素材剥片の整形加工、切断調整や側縁調整と素材剥片の裏面に広がる平坦調整によって形態が決定しているのでその調整加工を詳細に観察することによって台形様石器の様相を紐解くことができよう。台形様石器は横長剥片のみならず縦長剥片も素材としている点は看過すべきでないであろう。横長剥片を素材とした台形様石器は基部に対向する縁部を切断して、細部調整を施した例や基部を切断して縁辺のまま利用した例がある。

群馬県三和工業団地Ⅰ遺跡では2点の剥片が接合した縦長剥片が認められる（第4図）〔津島1999〕。上段1～3・中段1～3の縦長剥片は分割され、二側縁ないし一側縁に細部加工が施され、他側縁は打面を利用して台形様石器として製作されたものであろう。下段1～3は資料的に少ないが、接



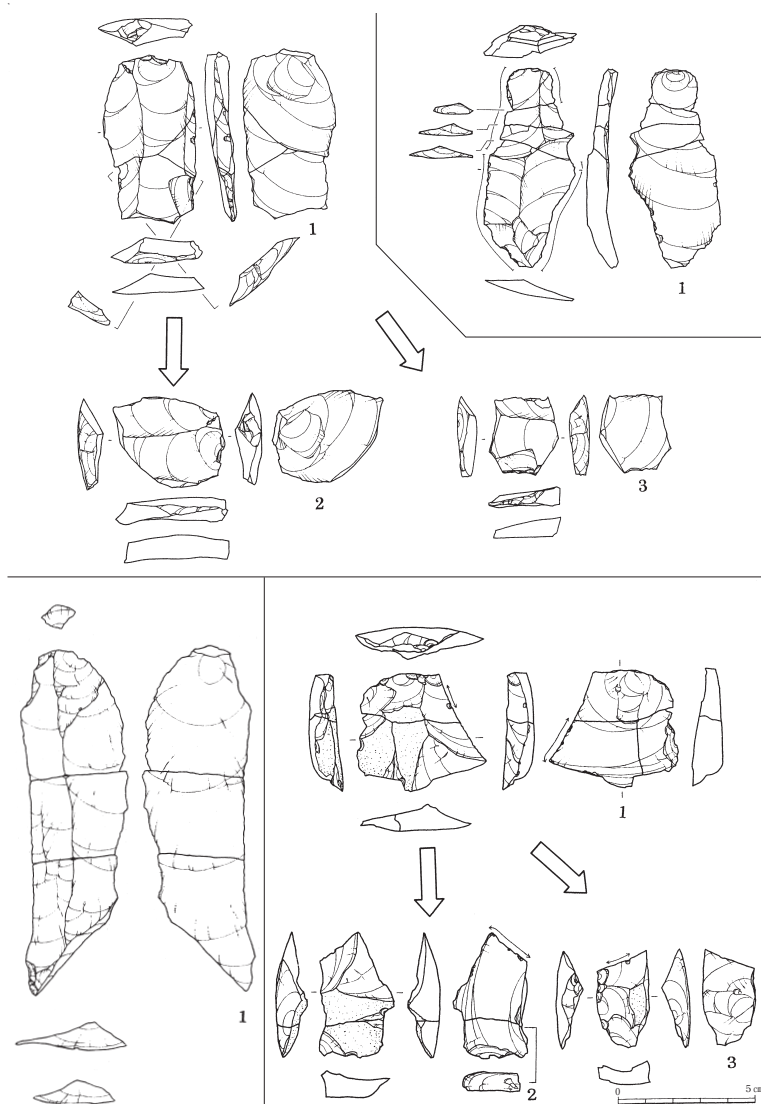
1・2. 群馬県分郷八崎遺跡, 3. 群馬県和田遺跡, 4. 群馬県藪塚遺跡, 5. 群馬県山内出B遺跡,
6～8. 群馬県内堀遺跡, 9. 群馬県今井見切塚遺跡, 10. 栃木県上林遺跡, 11. 千葉県東峰御幸畑西遺跡,
12. 千葉県十余三稻荷峰西遺跡, 13. 千葉県原山遺跡, 14・15. 千葉県中山新田I遺跡,
16. 千葉県南三里塚I遺跡, 17. 東京都多聞寺前遺跡, 18・19. 東京都野水遺跡, 20. 神奈川県津久井城馬込地区

第3図 関東地方から出土した基部調整尖頭石器



第4図 群馬県三和工業団地Ⅰ遺跡出土の接合資料

合例の裏面に平坦な加工が顕著に施されている。削器の可能性あるが、加工の位置が削器とは違和感がある。台形様石器を製作しようとしていたものであろう。千葉県東峰御幸畑東遺跡（第5図上段）では石器集中3から出土したもので、1～3の流紋岩製の縦長剥片は接合資料（No. 62）や1の珪質頁岩接合資料（No. 63例）に見られるように、分割された台形様石器が接合して石刃に復元された例が複数認められる〔永塚 2004〕。また群馬県下舐牛伏遺跡〔岩崎 1986〕第2文化層の1は先細る端部に細部加工を施した安山岩製の縦長剥片を素材としたものを切断して3分割された資料が接合

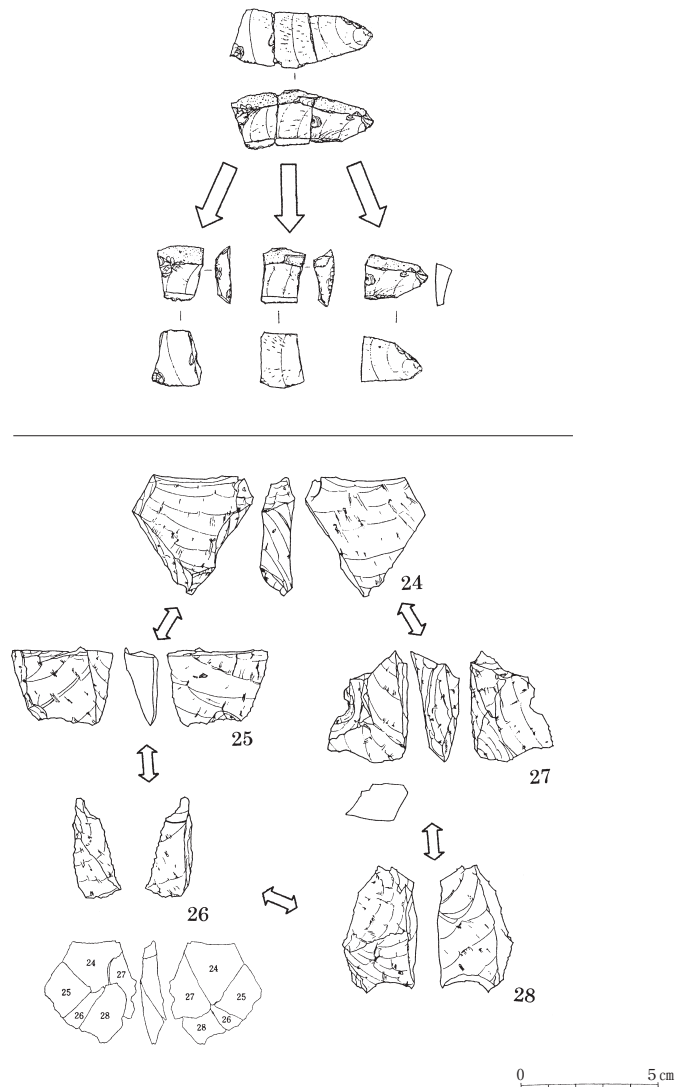


第5図 (上段) 千葉県東峰御幸畑東(空港No.62)遺跡の接合資料
(下段左) 群馬県下舐牛伏遺跡の接合資料
(下段右) 千葉県墨古沢南Ⅰ遺跡の台形様石器の接合資料

したものである(第5図下段左)。安山岩製の台形様石器の素材の可能性が高い[岩崎1986]。

このような例は鹿児島県上場遺跡出土例から上場技法[芹沢1971]または富山県西法寺遺跡の西法寺技法(第6図上段)[芹沢前掲]と呼称された技法と非常に類似している。

やや後出になるが、相模野台地の神奈川県吉岡遺跡群C区B3層下部上面から出土した基部加工を施したナイフ形石器、二側縁加工のナイフ形石器と共伴して台形様石器が認められる(第17図)。1・2の台形様石器はやや大きめの横長剥片を素材としたものと縦長剥片を用いたものがある。



第6図 (上段)西法寺技法[芹沢1967]，(下段)群馬県和田遺跡の接合資料

そのうち定形的な石刃状の縦長剥片を切断して切断面に微細な加工を施した台形様石器がある〔白石・加藤1996〕。このような例は群馬県後田遺跡（第9図13）〔麻生1987〕や同県見立溜井遺跡（第9図14）〔大塚・白石典1988〕の台形様石器も同様であり、ほぼ同時期に位置づけられよう。

なお千葉県墨古沢南Ⅰ遺跡では玉髄製の横長剥片が中位で分割され、側縁に加工した台形様石器が接合して幅広の剥片となった。（第5図下段右）〔新田2004〕。

かくて定形的な縦長剥片を分割して台形様石器の素材にしていた可能性があることから、岩宿Ⅰ期の段階で既に行使されていたものと見なすべきであろう。

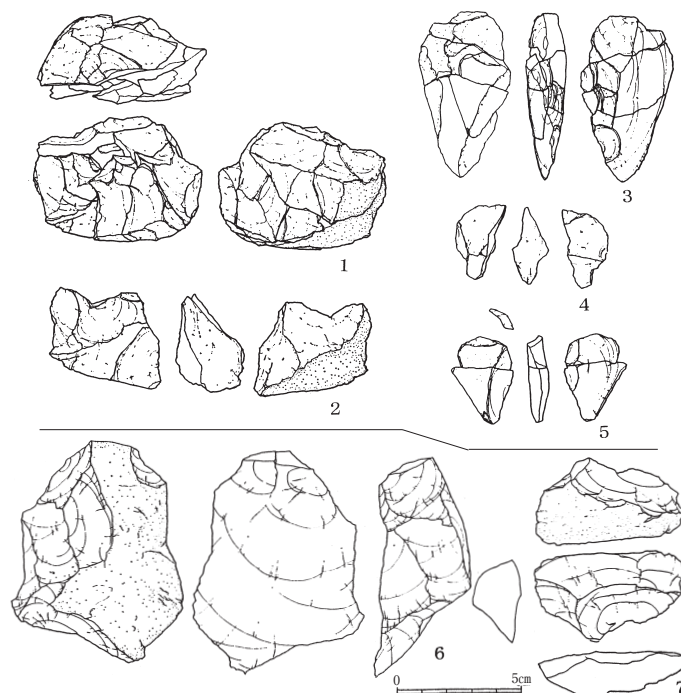
横長剥片による石核は、多方向からの剥片剥離によって多様な横長剥片の素材によって台形様石器が作りだされている。そのうち横長剥片に近い素材を分割して台形様石器を作り出している事例を紹介しておこう。好例は群馬県和田遺跡（第6図下段）や古城遺跡で認められる（第8図4）〔若

月 1983, 大工原 1988]。一辺は素材の縁辺に細部加工を施しているが、対向する縁は断ち切って切断面によって製作した例がある。基本的には横長剥片の打面部に対向する縁辺部を切断する例と類似するが、あたかも二分割して台形様石器が製作されているかのようにも見てとれる。この場合、縦長剥片を素材としたものと見間違える場合もある。他方和田遺跡の安山岩の接合例（第 6 図 24～28）では、横長剥片を切断して、目的的な剥片を得て台形様石器にも製作していたのであろう。

このようにみると、台形様石器は切断手法と平坦な調整加工技術⁽³⁾を用いて製作している点に特徴が見て取れる。とりわけ台形様石器の素材は切断手法によって剥片を分割したり、打面の一端を除去するために用いられたものであろう。

横長剥片を素材とした好例は群馬県分郷八崎遺跡〔白石典 1987, 右島・白石典 1988〕の接合資料や石核、作出剥片に見られる。白石典之〔1987〕によれば、黒色安山岩の礫を素材として、打面を転移させて大小の剥片を剥離したものを石核とする（第 7 図上段 1・2）。小形の場合は寸詰まりの剥片を剥いで基部調整尖頭石器や台形様石器の素材を製作したものであろう。また一定の位置に打面を設定せず、正面と裏面を交互に剥離して不定形な剥片を剥離している（第 7 図上段 3～5）。群馬県下舐牛伏遺跡〔岩崎前掲〕では礫面を残した幅広の縦長剥片の側辺から横長ないし寸詰まりの剥片を剥いており、台形様石器ないし基部調整尖頭石器を製作していくのであろう（第 7 図下段 6・7）。

以上の点から横長剥片のみならず縦長剥片を用いた台形様石器や横長剥片を分割して縦長にして台形様石器の素材としている点もみられることから、当該期の剥片石器を石刃と剥片、あるいは縦長剥片と横長剥片を厳密に対置させて考慮するのは難しいであろう。



第 7 図 (上段) 群馬県分郷八崎遺跡〔白石典 1987〕, (下段) 同県下舐牛伏遺跡〔岩崎 1986〕

④……………台形様石器の石材と製作過程

先に見てきたように、台形様石器は横長剥片のみならず縦長剥片を用いて製作されている。また横長剥片の中にも縦位に素材を分割してあたかも縦長剥片のようにして形態を整えて台形様石器にした例もある。このような例はおおよそ局部磨製石斧が卓越した段階に見られることから、横長剥片と縦長剥片を用いるケースはさらにさかのぼるであろう⁽⁴⁾。

台形様石器の特徴は方形や三角形の形態を基本としている。それ故横長剥片つまり貝殻状剥片のような形状であれば、そのまま縁辺加工を施して台形様石器を作り出しているかのように見えるが、実際は打面部を切断したり、他側縁部を切断したりする。他方縦長剥片は剥片を分割して複数の台形様石器の素材を作り出すことが可能であるが、岩宿Ⅰ期の台形様石器の素材は1点の台形様石器を分割して製作するにとどまっている蓋然性が高い。しかしその後の後田期では比較的大形の石刃状の素材を用いて分割するので、複数の素材を生産するようになる。

各地域の台形様石器の石材を見てみよう。北関東地方の台形様石器の石材は大きく三分される。一として、群馬県三和工業団地Ⅰ遺跡〔津島前掲〕、山内出B遺跡〔加部・阿久澤2009、加部2010〕、藪塚遺跡〔小菅1990〕、山上城遺跡〔加部2005〕では黒曜石製が卓越する。二として、大上4遺跡では黒曜石を主としながらも黒色安山岩も利用している。折茂Ⅲ遺跡〔矢島2005〕でも同様に、黒曜石の台形様石器が17点出土している。長さの平均は27.2mm、幅は平均22.9mmを計る。黒色安山岩製はその可能性のある剥片を含めた台形様石器は4点が出土している。黒曜石製の大きさと遜色ない例もあるが、最も大きいもので長さ62.9mm、幅42.6mmの大形例となっている。このように見ると、大形例は明らかに石材を変えている。黒曜石はこぶし大の原礫を縦位ないし横位からの計画的な剥離により無駄の少ない素材を得ていたのであろう。古城遺跡でも黒曜石4点と黒色安山岩2点が出土している〔大工原1988〕。三として和田遺跡では全て黒色安山岩製で台形様石器が製作される。藤岡北遺跡はチャートとメノウが凌駕している〔軽部1995〕。他方下触牛伏遺跡の台形様石器も黒色安山岩、凝灰岩、黒色頁岩といったように、黒曜石を用いていない一群もある。また分郷八崎遺跡では黒曜石製1点、チャート製1点を除いて全て黒色安山岩製である〔柿沼・右島・白石1986、白石1987〕。黒曜石をあまり用いず、黒色安山岩を利用するのは原産地に近いからであろう。またメノウは常総方面から持ち込まれたものかもしれない。

下総台地では珪質頁岩が凌駕している。草刈六之台遺跡C13-Dブロック、東峰御幸畑西（空港No.61）遺跡では3か所の遺物集中地点群（エリア）があり〔永塚前掲〕、エリア1では珪質頁岩製が凌駕し、他にチャート製、安山岩製、メノウ製が見られる。それに対してエリア2では安山岩製が卓越し、チャート製が続き、珪質頁岩製、粘板岩性が認められる。そしてエリア3では珪質頁岩製が多く、チャート製が続き、安山岩製、メノウ製が見られる（第14図）。それぞれ環状集落を形成しているので、同一集団による移動の結果なのか、3集団による構成なのか不明であるが、今後同一母岩や接合資料についてエリアを超えて比較検討すれば、解決できるかもしれない。対して草刈Ⅵ之台遺跡Cブロックで黒曜石製の台形様石器が卓越しているようである〔島立前掲〕。坊山遺跡では黒曜石13点とチャート3点よりなり、圧倒的に黒曜石の依存率が高い。

墨古沢南Ⅰ遺跡ではガラス質黒色安山岩、流紋岩、黒曜石、砂岩がそれぞれ1点、玉髄8点、トロトロ石1点よりなる。

武蔵野台地の多摩蘭坂遺跡では台形様石器の石材はチャート（珪岩）10点、黒曜石1点、頁岩2点、珪質頁岩2点よりなる。黒曜石も見られるが、圧倒的に珪岩が多い。高井戸東遺跡ではⅩ層が珪岩、Ⅸ下層が安山岩、Ⅸ中層が珪岩である。

武蔵野台地では礫層ないしは多摩川の河川礫を利用した珪岩を利用したのであろう。

相模野台地の津久井城馬込地区ではチャート1点、硬質細粒凝灰岩2点、黒曜石6点で構成される。

吉岡遺跡Ⅳ区では水晶製の台形様石器2点よりなる。なお基部調整尖頭石器は黒曜石製で、スクレイパーや石核などにも黒曜石の用材が目立つ。

このように各台地で用いられる石材は異なっているようである。北関東地方の群馬県内でも黒曜石を主石材としながらも黒色安山岩との結びつきが目立っている。下総台地では珪質頁岩、武蔵野台地ではチャート、相模野台地では黒曜石の利用が見られる。

⑤……………台形様石器の分類

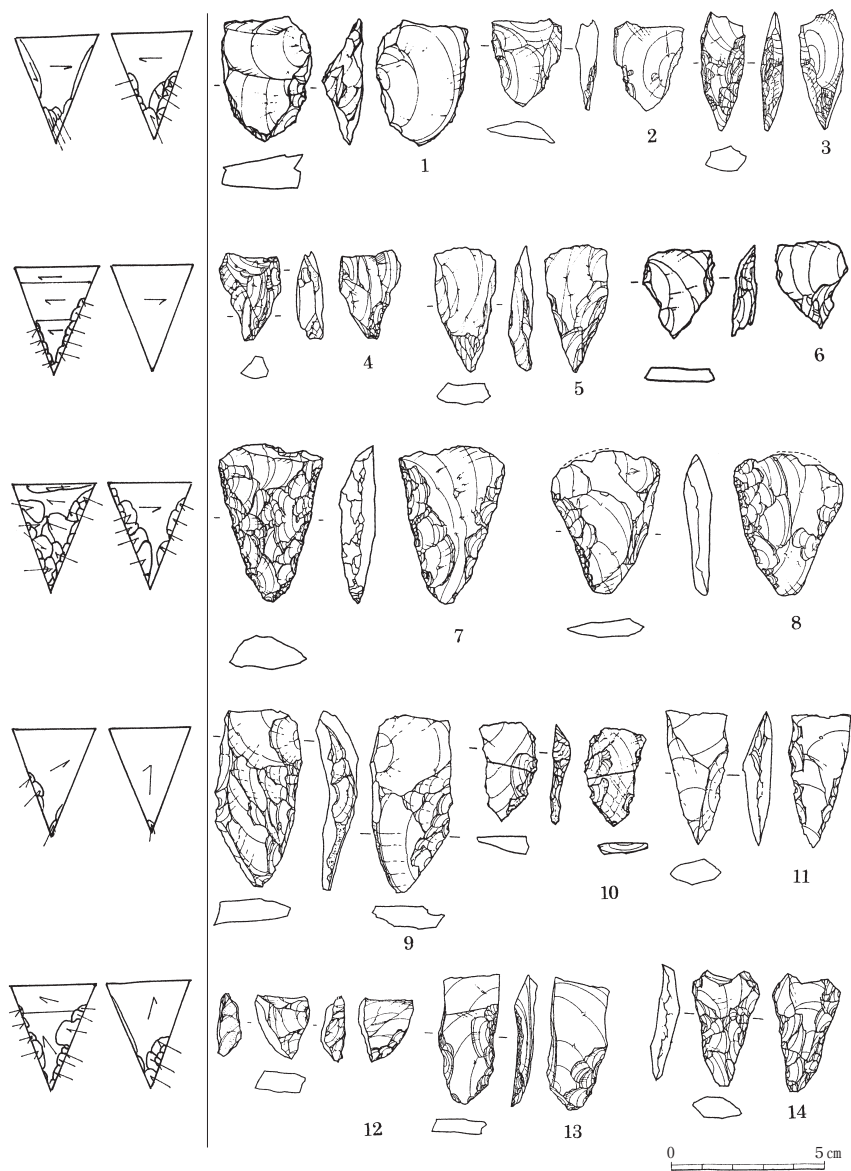
型式学的に台形様石器を区分すると6類に分類される。横長剥片と縦長剥片の双方を素材として利用している。水平ないし斜位に位置する刃部とその刃部に交わる両側縁の細部加工等によって、Ⅰ～Ⅲ類・Ⅵ類の平刃とⅣ・Ⅴ類の斜刃の二様相に区分されよう。基部形態も大きく尖基と平基で区分される。加工の在り方は一側縁が裏面から正面、他側縁が正面から裏面に施される錯向剥離が顕著となっている。また表裏には平坦な調整剥離が施される例も目立つ。中には器体の上半部まで施した例があるので、横長剥片の打面調整のみ施したものではないであろう。縦長剥片を素材とし例は顕著な平坦調整は施さないが、中には部分的に付加された台形様石器も見られる。

Ⅰ類（第8図）

二等辺三角形を逆位にした形態で、三角形の底辺に相当する部位を刃部として水平に置き、基部は鋭く尖る。二縁辺は側縁加工や面的な平坦剥離が施される。横長剥片を素材とした例は素材の側縁部を刃部とし、打面部は平坦な調整加工が裏面に施され、対向する辺には正面に平坦な調整加工ないしは側縁加工が施される。また縦長剥片を素材としたものは打面を基部とし、端部を刃部に置いている。

1～10は横長剥片を素材としたもので、1は二側縁に加工を施したもの。2は二側縁加工であるが、部分的な錯向剥離による加工となっている。3は二側縁加工であるが、正面は両側縁から平坦な加工が施されるが、4～6は正面左端の加工は部分的であり、裏面の基部加工により補っている。7～9は裏面から正面の加工と正面から裏面に向けての平坦な加工が施される。7・8は千葉県草刈六之台遺跡出土例で、大きさ、形状、加工が近似している。とりわけ正面は刃部を除いて両側から平坦な加工で覆われる。また7に対して9・10は両側から平坦な加工を表裏に大きく施している点で共通する。

11～14は縦長剥片を素材としたもので、打面を基部に配している。11は正面基部のみ入念に側縁加工が施される。12は一側縁が急斜な側縁加工が施され、裏面基部には部分的な加工が見られる。13・14は表裏面に平坦な加工が施される。とりわけ13は切断により素材を分割して作り出していることから、横長剥片が原形の可能性がある。



1・5・12. 千葉県東峰御幸畑西(空港No.61)遺跡, 2・12. 神奈川県津久井城馬込地区, 3・13. 群馬県大上遺跡,
4. 群馬県古城遺跡, 6. 群馬県勝保沢中ノ山遺跡, 7・8. 千葉県草刈六之台遺跡,
9. 群馬県今井見切塚遺跡 15・16・17 地点, 10. 群馬県藤岡北遺跡, 11・14. 群馬県今井見切塚遺跡 33 地点

第8図 I類の台形様石器

Ⅱ類 (第9図)

I類の基部が尖基なのに対して、本類は平基で構成される。したがって外形は逆台形ないし方形となっている。素材は寸詰まりの縦長剥片ないしは横長剥片の打面部を一側縁に配し、他側縁は切断または細部調整が施されている。切断により打面を除去し、そのまま側縁とする場合もあるし、平坦な調整を施す場合もある。



- 1・3. 千葉県東峰御幸畑西 (空港No.61) 遺跡, 2. 群馬県藤岡北山遺跡, 4. 千葉県中山新田 I 遺跡,
5. 群馬県勝保沢中ノ山遺跡, 6. 栃木県上林遺跡, 7. 神奈川県津久井城馬込地区, 8. 埼玉県清河寺前遺跡,
9・10. 千葉県天神峰奥之台遺跡, 11. 群馬県下舐牛伏遺跡, 12. 千葉県坊山遺跡, 13. 群馬県後田遺跡,
14. 群馬県見立溜井遺跡, 15. 群馬県折茂Ⅲ遺跡, 16. 群馬県三和工業団地 I 遺跡, 17. 千葉県南三里塚宮原 2 遺跡

第9図 Ⅱ類の台形様石器

1～12は横長剥片を素材としている。そのうち1～10は二側縁に加工を施したものである。6・10～12は錯向剥離が見られ、他はおおむね裏面から正面に向けて加工が二側縁に施されている。打面部ないし打面方向に位置する加工は5?・7において部分的な調整が施された例で、打面部を切断し、その上端に部分的な加工が平坦な加工が施される。11は錯向剥離で裏面左側縁は顕著な平坦な加工に対して、12は裏面両側縁に平坦な加工が側縁に小さく施される。

13～17は縦長剥片を素材としたもので、打面を基部としたものが多い。13・14はやや幅広の縦長剥片を横位に切断して用い、部分的な側縁加工を施したものである。15・16は両側縁の加工が錯向剥離、17は裏面基部を中心に両側からの平坦な加工が施される。

Ⅲ類 (第10図)

1～3・9～11は最大幅が刃部にあり、側縁と刃部の交わる一端は末広がり呈すように、側縁を挟り込むような加工により角状の返りを作り出している。一側縁の加工は直状、他側縁は挟り込みを施した細部加工が顕著となっており、左右非対称形となっている。

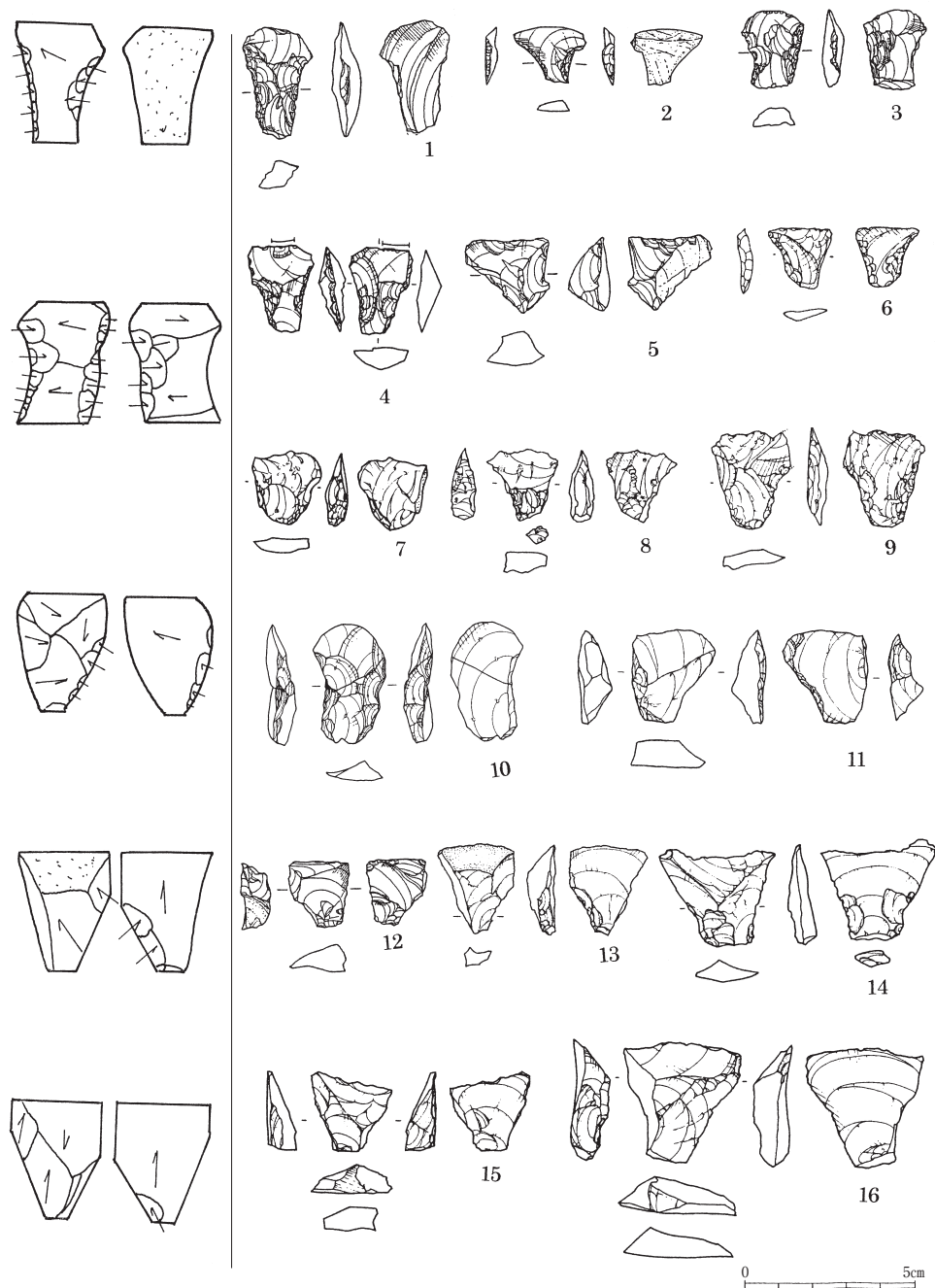
1～11は横長剥片を素材としたもので、一側縁ないしは両側縁の基部から刃部にかけて挟り込むように調整加工を施し、刃部は曲刃部ないし直刃部と交わるため角状を呈す。9～13は一側縁の加工は直状、他側縁は挟り込みを施した細部加工が顕著となっており、左右非対称形となっている。1は正面刃部を除いて両側縁からの平坦な加工が施される。2は打面部に顕著な挟り込みによる側縁加工が施される。3・4・6は裏面に平坦な加工が片側縁ないし両側縁から施される。7は打面部近くに礫面が認められる。8は正面下半部に両側から平坦な加工が施される。9は正面右端が欠損している。10は表裏面の両側縁を中心に平坦な加工が小さく施される。刃部が曲刃化し、平坦な加工が顕著である。11は打面部を一側縁、他側縁は裏面端部に錯向剥離が施される。

12～16は縦長剥片を素材としたもので、打瘤を残す例もある。基部から刃部方向に向けて末広がり素材を用いているために、幅広の刃部を呈す。加工は基部両側ないし片側に部分的に施している。12は一側縁が直状、他側縁は外に広がりながら直上する左右非対称形で、裏面は平坦な調整が施される。13は剥片の側縁部を切断したもので、14～16は横長剥片の可能性もある。刃部と側縁のなす角が末広がり呈す。そのうち14の裏面加工は両側から部分的な平坦な加工を施している。15は両側縁に加工が施されている。16は一側縁による加工が施されている。

Ⅳ類 (第11図)

左右非対称形の三角形の形態を呈す。Ⅰ～Ⅲ類に比較して刃部が斜刃の例である。刃角は急斜ではないが、側縁と刃部のなす角度はおおむね60度前後が多い。基部は両側縁が交わる部位を尖らせている。

1～13は横長剥片を素材としたもので、3・8は一側縁加工で、他は二側縁加工、ただし1・2・4・6は一側縁が部分加工、5・7は基部を中心に一側縁は平坦な加工が目立つ。6は横長剥片を切断して二側縁に加工を施したものの。8の裏面基部は微細な加工が施される。9～13は錯向剥離であるが、裏面にも顕著な平坦剥離が施される。9は両側縁からの平坦な加工のみならず裏面二側縁も及ぶ。このような傾向は10～13も同様である。正面の加工は10～13が一側縁ないし部分的な加



1～3・12. 群馬県折茂Ⅲ遺跡, 4. 群馬県三和工業団地Ⅰ遺跡, 5・6・9. 千葉県坊山遺跡, 7・8・14. 千葉県中山新田Ⅰ遺跡, 10. 群馬県大上遺跡, 11・13. 千葉県南三里塚宮原Ⅱ遺跡, 15・16. 千葉県東峰御幸畑西(空港No.61)遺跡

第10図 Ⅲ類の台形様石器

工にとどまっている。

14～17は縦長剥片を素材としたものである。14は側端部に礫面を残した寸詰まりの剥片で側縁加工と他側縁は平坦な加工が二側縁に施される。15は基部に微細な加工, 側縁部には二側縁の側縁加工を部分的に施したもの。16・17は裏面基部を中心として顕著な平坦な加工を施している。



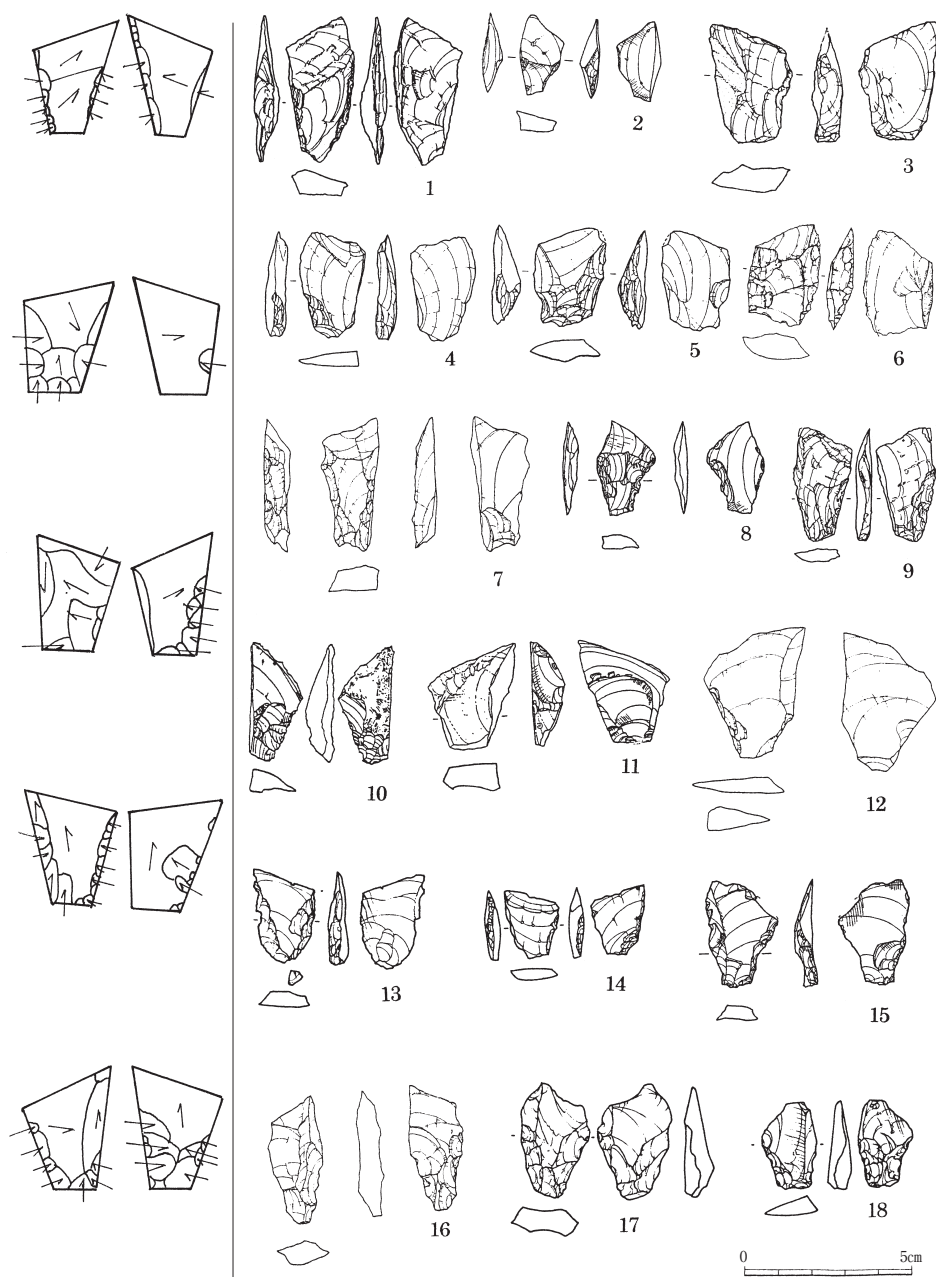
1. 群馬県天神峰奥之台遺跡, 2. 千葉県東峰御幸畑西 (空港No. 61) 遺跡, 3・5. 千葉県池花南遺跡,
4・14. 群馬県大上遺跡, 6. 群馬県和田遺跡, 7・17. 群馬県下舐牛伏遺跡,
8. 千葉県東峰御幸畑東 (空港No. 62) 遺跡, 9. 千葉県坊山遺跡, 10・15. 群馬県藤岡北山遺跡,
11. 群馬県山内出B遺跡, 12・13. 群馬県今井見切塚遺跡 33 地点, 16 埼玉県清河寺前原遺跡

第11図 IV類の台形様石器

V類 (第12図)

台形状の形態を呈す。左右非対称形で刃部は斜刃である点はIV類と大差はないが、基部は平基である点に差異がある。基部は不安定なものから幅広の安定した平基のものからなる。

1～9は横長剥片を素材としたものである。1は打面部上に側縁加工，端部は部分的な細部加工が施される。2は打面を切断した側縁部に部分的な加工，他側縁は細部加工が施される。3は正面



1・9. 東京都高井戸東遺跡, 2. 群馬県大上遺跡, 3. 東京都多摩蘭坂遺跡, 4・5. 千葉県天神峰奥之台遺跡, 6. 栃木県上林遺跡, 7・12・16. 群馬県下舐牛伏遺跡, 10. 群馬県和田遺跡, 11・15. 群馬県折茂Ⅲ遺跡, 14. 群馬県三和工業団地Ⅰ遺跡, 13・17・18. 千葉県中山新田Ⅰ遺跡

第12図 V類の台形様石器

の打面部側に部分的な側縁加工が見られる。4は基部近くの片側縁に部分的な平坦な加工が裏面まで及ぶ。5の正面には基部を中心として二側縁に平坦な加工が施される。6は正面の二側縁に平坦な加工が入念に施される。その場合礫面を打面とした部位は残置する。7は横長剥片を切断した細身の素材を利用したもので、両側縁に側縁加工、裏面基部に一方向から平坦な加工が及んでいる。8は刃部が偏り、左右非対称形を呈す。正面は両側縁から平坦な剥離面で覆われ、裏面一側縁まで加工が及ぶ。9は打面を切断した後にその端部に平坦な加工を施し、他側縁は裏面に平坦な加工を配している。

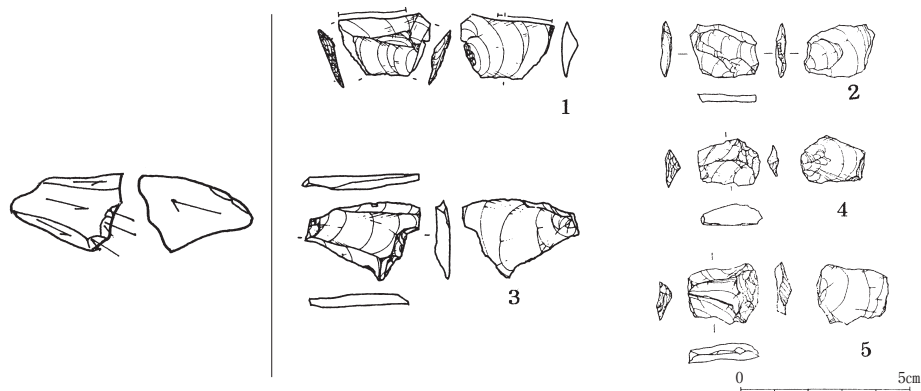
10・11は7同様横長剥片を縦位に切断したものである。10は基部に相当する表裏面に平坦な加工が及ぶ。11は一側縁に側縁加工が施されている。

12～18は縦長剥片を素材としたものである。12は基部に近い両側縁に加工を施したものの、13は一側縁に細部加工を施し、他側縁は切断面を利用したもの、14・15錯向剥離で一側縁に細部加工を施し、他側縁は裏面に平坦な加工を施している。15は側縁のみならず裏面基部にも平坦な調整が施されるが、裏面は器体中位まで両側から平坦な加工が及ぶ。16～18は裏面に両側縁から平坦な加工を施したもので、正面の加工が16のように粗であるが、裏面は器体中位まで両側から平坦な加工が及ぶ。17は表裏面に両側縁から平坦な加工が施されたもの。18は正面に基部周辺、裏面は両側からの平坦な加工が施される。

VI類（第13図）

やや寸詰まりの縦長剥片を素材とし、端部をそのまま又は切断を施したもので、その後に微細な加工を加えたものである。平行する両側縁を刃部と基部にしている。筆者が指摘したウワダイラ型⁽⁵⁾〔白石1978〕と称した台形石器に相当する。

1は一条の稜線をもつ定形的な縦長剥片で、打面部はわずかに切断し、その裏面に微細な加工を施し、端部は入念な側縁加工を施したものの、2・3は二条の縦長剥片を素材としたもので、2は打面部、3は端部に側縁加工を施している。4・5は縦長剥片の端部を切断または直接細部加工を施したもので、側縁を刃部と基部に利用いたものと思われる。



1. 群馬県三和工業団地 I 遺跡, 2. 東京都下里本邑遺跡, 3. 千葉県東峰御幸畑西（空港No.61）遺跡,
4・5. 東京都武蔵台遺跡

第13図 VI類の台形様石器

⑥……………台形様石器の層位的出土例

ここで示す台形様石器の層位的出土例は一遺跡の中で確実に層位差をもって出土した複数の台形様石器を指している。武蔵野台地で出土したⅩ層上部、Ⅸ層下部ないしⅨ層上部の層序は遺跡毎で堆積状態は異なっている。本来ならば一層位内から出土した一石器群を深度によって認定することは例えば各層からの深度差、石材差、器種組成や形態が異なっているとかのデーターに基づかなければならない。対して相模野台地ではB5層からB3層下部層の土層堆積は複数の黒色帯と黄褐色土層が交互に形成されているので、石器群の層位を捉え易い。しかし地表土から深いために台形様石器の発掘出土例は決して多くない。下総台地も武蔵野台地と同様の堆積状態を呈す。土層の堆積状態が安定し、複数の台形様石器が層位的に出土した遺跡も認められる。

佐藤宏之は最も古い段階のⅩ層をⅠ期として求心状剥片を素材とするⅠa類が凌駕するという。Ⅱ期はⅡ類が北関東地方で発達するが、後半期には消失し、武蔵野台地ではⅠa・Ⅰb類が分布し、地域差的な様相を帯びるという。Ⅲ期後半ではⅡ類は姿を消し、Ⅰ-b-Ⅰ類が出現するという〔佐藤前掲〕。

近年武蔵野台地の東京都野水遺跡〔小池 2006〕や神奈川県津久井城馬込地区〔畠中 2010〕では佐藤編年のⅡ期に相当する時期で、Ⅱ類がまとまって出土している点が看過できない。またⅢ期では群馬県後田遺跡での台形様石器の形態に注目するが、西法寺技法のような切断手法が卓越する点に注目しなければならない。また佐藤の第Ⅰ期ないしそれ以前に位置づけられる吉岡遺跡群D区B5層から台形様石器と思われるチャート製の石器が出土しているので初期の台形様石器として注目しておきたい。

ここでは遺跡内で台形様石器が層位的に出土した例を中心として検討を加える。

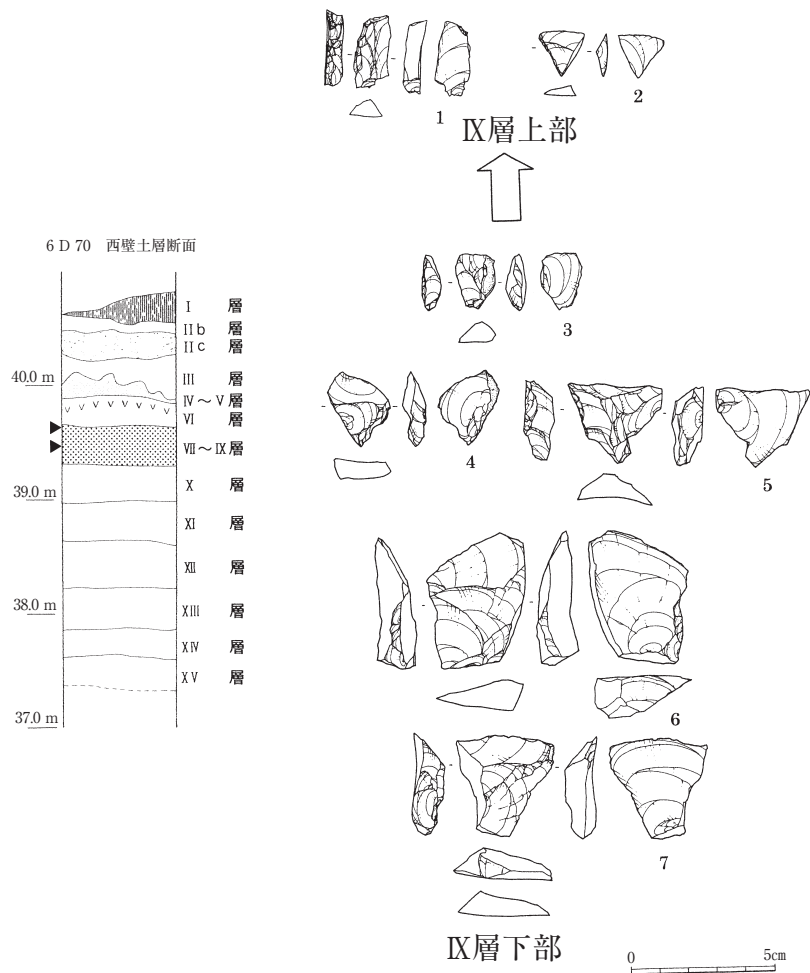
(1) 下総台地 (第14・15図)

千葉県東峰御幸畑西遺跡 (空港No.61 遺跡) (第14図) ではⅨ層 (黒色帯) の下部から出土した石器群で石器集中32が相当する。その集中から台形様石器がまとまって出土している。4～7は珪質頁岩製が多いが、中には安山岩で製作された台形様石器が1点出土している。4は斜刃で基部を尖らせたⅣ類、5は台形様石器の形態は平刃で基部が尖基に調整されたⅠ類、6はやや大形の斜刃で基部が平基の安山岩製のⅤ類、7は平刃で基部が平基に調整され、刃部方向に広がったⅢ類で構成される。

石器集中5はⅨ層 (黒色帯) の上部から出土した石器群で、2は珪質頁岩製の打面部を切断し、他側縁に細部加工を施したⅠ類の台形様石器である、他に1点の基部が折れたナイフ形石器が出土している〔永塚 2000〕。

以上東峰御幸畑西 (空港No.61) 遺跡では (Ⅸ層) Ⅰ類～Ⅴ類→ (Ⅶ層) Ⅰ類の変遷をたどる。千葉県草刈六之台遺跡ではC13-Bブロックで2文化層、Cブロックで1文化層が検出されている (第15図)。CブロックⅩ～ⅩⅠ層で出土した台形様石器は1点である〔島立 1994〕。

10は珪質頁岩の横長剥片を素材としたもので、正面両側縁に平坦な加工が施される。9は尖頭器



第14図 千葉県東峰御幸畑西(空港61)遺跡の台形様石器の層位的出土例

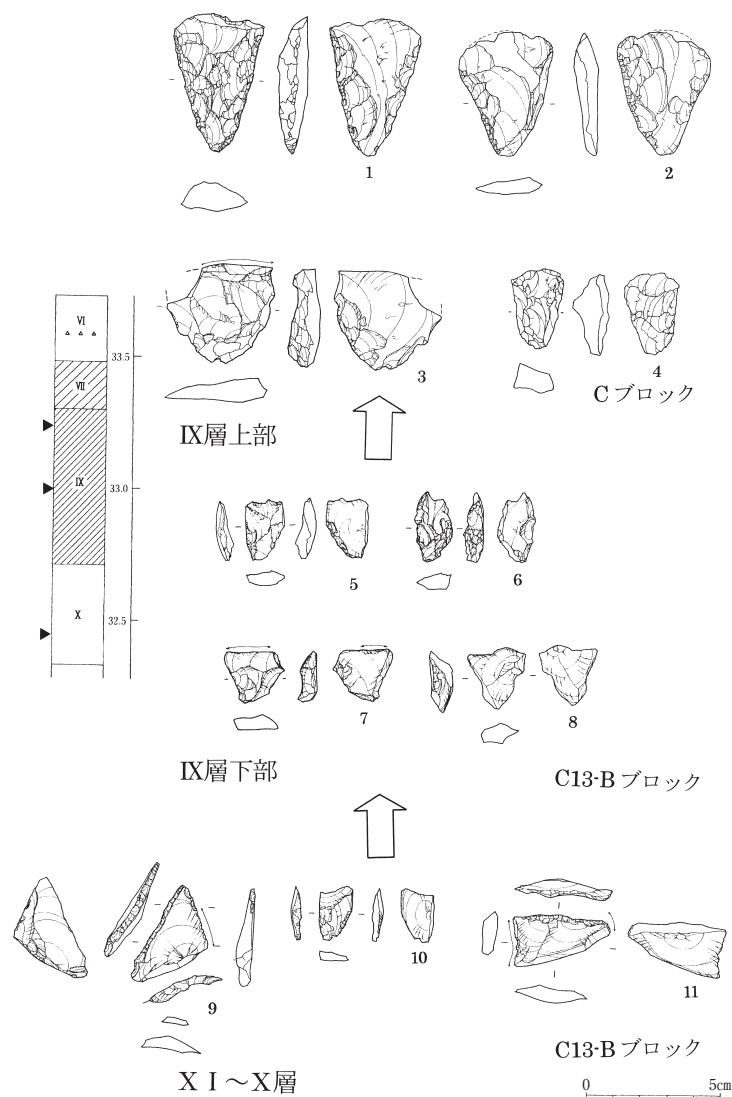
とされた石器で、一側縁は打面部を利用し、他側縁が細部加工によって施され、I類の台形様石器の可能性があろう。また11は使用痕ある剥片と報告されているが、正面打面側に平坦な細部加工が施され、I類の台形様石器に相当しよう。いずれも千葉県南部の嶺岡産の珪質頁岩である〔島立2004〕。

IX層下部の台形様石器は5点が出土している。石材は珪質頁岩が最も多く3点で、他にホルンフェルス1点、黒曜石1点で構成される。5は横長剥片を素材とし、正面は一側縁を平坦に、裏面は一側縁のみ平坦な加工による錯向剥離が施されたI類の台形様石器、6は斜行する刃部に二側縁に平坦な加工が施され、裏面打面部にも平坦な加工が施されたIV類、7は平刃を最大幅としたもので、やや粗い加工が両側縁から施されたIII類で構成される。8はI類に相当するが、一側辺に細部加工を施したものでI類である〔島立1994〕。

CブロックのⅨ層上部から出土した刃部を直刃としたⅠ類が2点出土している。1は正面に両側縁から平坦な加工が顕著に施され、裏面にも及ぶ。2は1の形態が類似する。正面は一侧縁に平坦な加工が施され、裏面にも平坦な加工が施される。また3は正面が多方向の剥離面よりなるが、一侧縁は側縁加工、裏面は打面部に平坦な加工が施された大形Ⅲ類の台形様石器。4は正面が顕著な加工は施さないが、裏面には数条の平坦な加工が一侧縁から施されたⅠ類の台形様石器である。

いずれも黒曜石は左側縁が裏面から正面、右側縁が裏面から正面に施されたⅡ類に相当しよう。

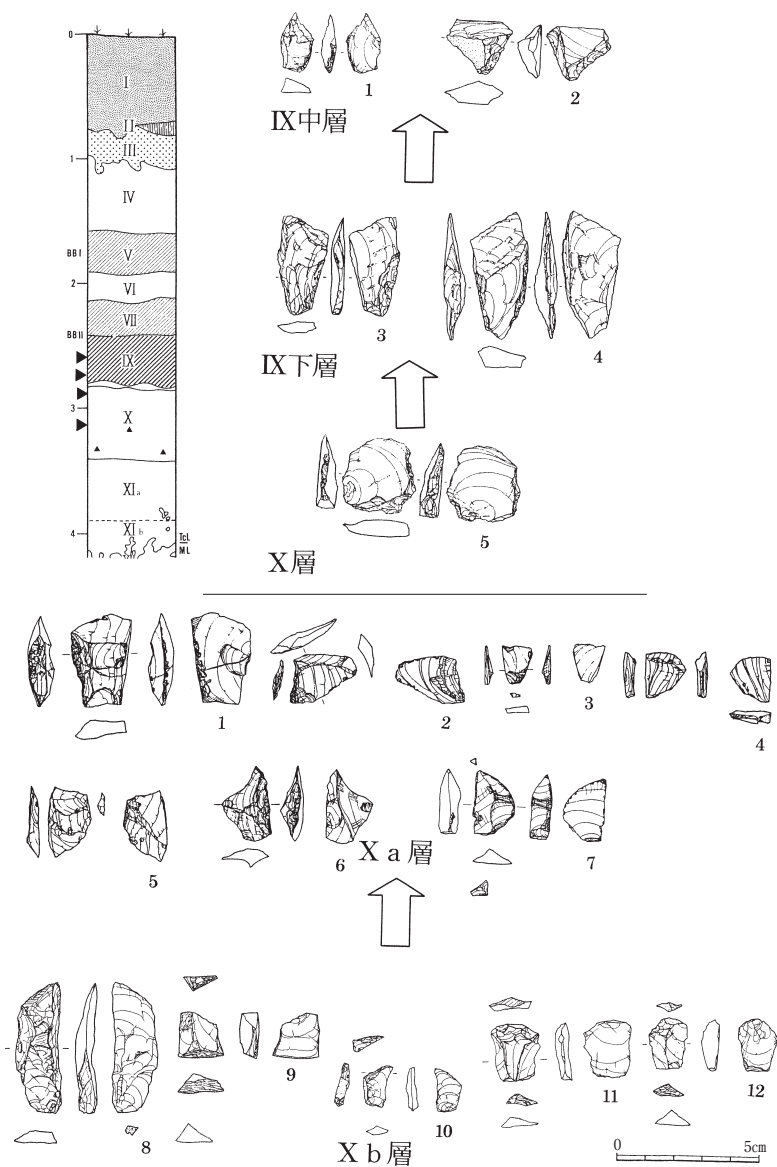
以上Ⅹ～ⅩⅠ層はⅠ類、Ⅳ類ないしはⅤ類→Ⅸ層下部はⅠ・Ⅲ・Ⅴ類、Ⅸ層上部はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類で構成されよう。



第15図 千葉県草刈六之台遺跡の台形様石器の層位的出土例

(2) 武蔵野台地 (第16図)

東京都高井戸東遺跡 (第16図上段) はX層, IX下層, IX中層から台形様石器が出土している (第16図上段)。X層の年代は36,290-35,190cal BPを測る [工藤2012]。5はX層から出土したもので、基部加工を特徴としたナイフ状石器と1点の幅広の縦長剥片を素材とした珪岩製の台形様石器が出土している。表裏面で剥離方向を90度転移している。調整加工は左側縁が裏面から正面、右側縁が裏面から正面に施されたⅡ類に相当しよう。その上層にあたるIX下層から出土した3・4の台形様石器は二側縁加工に施したもので、錯向剥離による側縁加工と裏面一側縁に見られる平坦



第16図 (上段) 東京都高井戸東遺跡X～IX層の台形様石器の層位的出土例
(下段) 東京都武蔵台遺跡Xb～Xa層の石器

な加工が施されている。Ⅴ類に相当しよう。Ⅸ層上部では安山岩製の台形様石器は1の斜刃の正面右側縁と裏面左側縁に細部加工を施したⅤ類と2の錯向剥離による加工を施したⅠ類よりなる。

東京都武蔵台遺跡（第16図下段）ではXb層とXa層で台形様石器が出土している。第1文化層の年代は34,220～33,720cal BP〔東京都埋蔵文化財センター2010〕である。Xb層では明瞭な台形様石器は出土していないが、竹岡俊樹氏によってチャート製の二次加工のある剥片や微細剥離のある剥片等が台形様石器として見直されている〔竹岡2003〕。8は縦長剥片を素材とし、細長い斜刃の両側縁に加工が施されている。9は切断剥片を利用したもので、刃部を側縁とするならばⅡ類、10～12は打面部に対向する端部に調整加工が施しているが台形様石器とするには躊躇される。

Xa層では1がへら形石器に分類されたものでⅡ類に相当しよう。2～6は黒曜石製で単一ないし複数の折断面を有する剥片、7は微細剥離痕を残す剥片の中には台形様石器に類似した形態や切断、調整加工など部分的に見られる。また黒曜石製のナイフ形石器と称された例は縦長剥片を素材としたもので、両側縁に微細な加工が施されている。それぞれⅠ・Ⅱ・Ⅳ類に相当しよう。

(3) 相模野台地（第17図）

神奈川県吉岡遺跡群C区ではB4層中部→B4層中部上位層→B3層下部で台形様石器が層位的に出土している。その年代は34,000～31,000cal BPである〔かながわ考古学財団2003〕。D区ではB5層から不定型な剥片を素材とした台形様石器が出土している。B区5層上面で35,040-33,990cal BPである。10の刃部は平刃のⅡ類、ないし11のような緩やかな斜刃のⅤ類で、一側縁に細部加工、他側縁は切断面で形成されたものが見られる。石材は全てチャート製である。D区ではB4層下部から出土した台形様石器は8・9の水晶製台形様石器と黒曜石製の基部調整尖頭石器が局部磨製石斧と共伴している。2点の水晶製の台形様石器は縦長剥片の側縁部を刃部としたもので、打面に対抗する側縁は二次加工が施される。またもう1点は基部となる位置に調整加工が施されている。Ⅲ類に相当しよう。

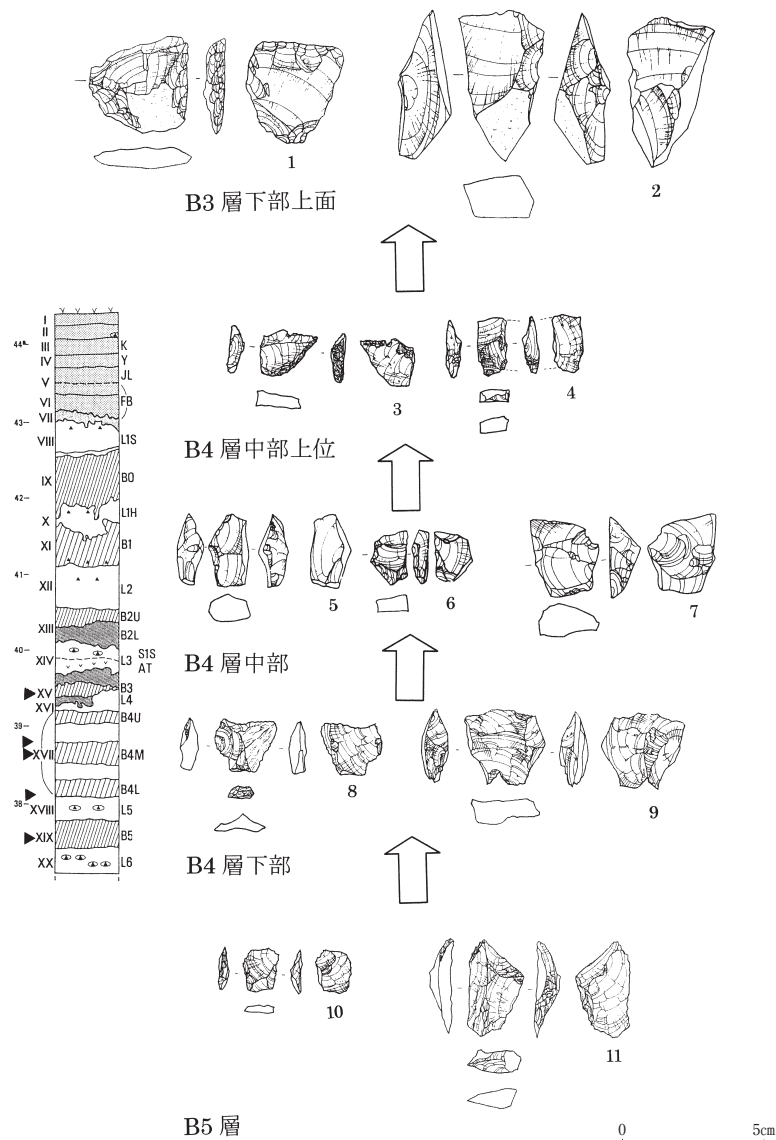
C区B4層中部では5～7はあめ色の分厚いガラス質流紋岩を用いた石器がまとめて出土した。

幅広の剥片の端部を切断し、対向する位置に調整した打面部を側縁部として用いている。台形様石器は平刃でやや厚手のものが目立つ。横長剥片ないし寸詰まりの縦長剥片を素材とし、加工は部分的にとどめている。Ⅴ類に相当しよう。

C区B4層中部上位では数点の石器が出土した。黒曜石製で寸詰まりの縦長剥片を素材としたものと思われる。3は一側縁を打面部として利用するが、他側縁は細部加工を施したⅡ類相当しよう。

C区B3層下部上面で出土した1・2の台形様石器は横長剥片製と縦長剥片製の二者がある。そのうち1は縦長剥片の側縁部を刃部とし、両側縁に入念な加工が施されているⅤ類、2は両側縁を切断し、片側縁のみに側縁加工を施した平刃のⅠ類である。図示していないが、2のような切断に類似するが、縦長剥片を分割して作成したⅥ類も組成している。

かくて（B5層）Ⅱ類ないしⅤ類→（B4層下部）Ⅲ類→（B4層中部）Ⅴ類→（B4層中部上位）Ⅱ類、（B3層）Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅴ類が相当しよう。



第17図 神奈川県吉岡遺跡群C・D区の台形様石器の層位的出土例

⑦……………関東地方の台形様石器からみた東西日本の展望

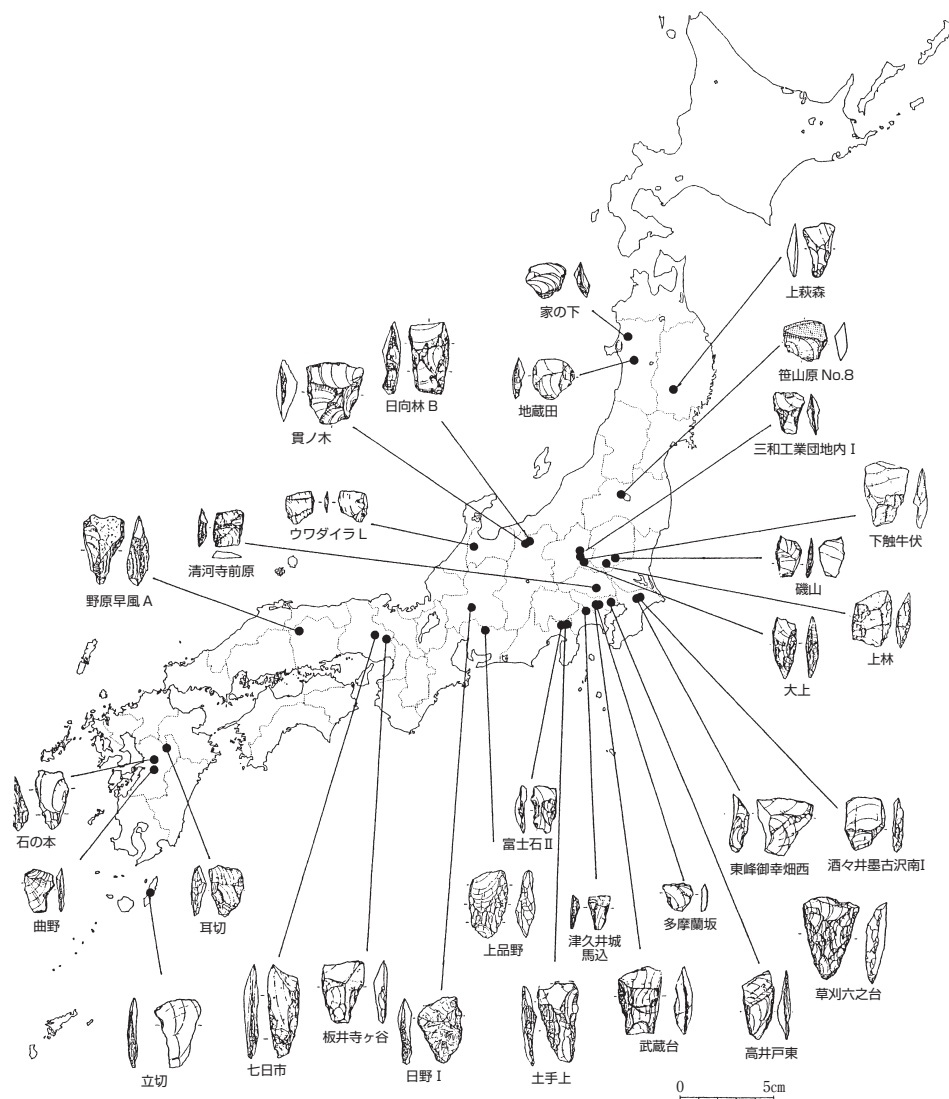
熊本県曲野遺跡〔江本1984〕から検出された台形様石器は始良 Tn 火山灰降灰以前の所産の石器文化が明らかになったことで特筆すべき発掘事例と言えよう。その結果九州地方では該期の石器群の発掘調査に対して注意が払われるようになり、鹿児島県石飛遺跡〔池水1967, 岩崎2007〕や熊本県石ノ本遺跡〔池田・江本1999〕, 同耳切遺跡〔村崎・江本1999〕, そして種子島に所在する鹿児島県立切遺跡〔田平1999〕など良好な台形様石器が出土する遺跡が検出されている。

中国地方では局部磨製石斧に伴って台形様石器が用いられていることが明らかになった。岡山県野原遺跡群早風 A 地点〔平井1979〕で局部磨製石斧に伴って水晶製の基部調整尖頭石器が出土することによって当該地域でも台形様石器が広がりを持っていることが予測される。そして広島県鴻の

巢遺跡〔藤野 1990〕や地宗寺遺跡〔三枝 1982〕、そして広島県和知白鳥遺跡〔沖・山田 2011〕や島根県原田遺跡〔伊藤編 2008〕でも台形様石器と基部調整尖頭石器が出土する。そしてついには近畿地方の兵庫県七日市遺跡〔山本 2004〕でも確認され、確実に西日本まで広がっていた。東海地方では岐阜県寺田・日野 1 遺跡〔吉田・橋詰・沢田 1997〕、愛知県上品野遺跡〔川添 2005〕、愛鷹山麓では静岡県中身代遺跡〔高尾 1989〕、土手上遺跡〔池谷 1998〕や富士石遺跡〔阿部 2010〕で安定して認められる。南関東地方との関連が容易に推定できる。また長野県北部の日向林 B 遺跡〔谷 2000〕では多くの台形様石器が出土しており、北関東地方との往来が推定できるところである。

下総台地や北関東地方では台形様石器が量的にも多く、型式学的にも多様な台形様石器で構成されている。

このように概観すると、関東地方における台形様石器は西南日本から東北日本にかけて分布していることが理解される（第 18 図）。台形様石器の一群は北海道地方まで広がっているかどうか意見



第 18 図 日本列島における主な台形様石器の分布

が分かれるところなので、今後の良好な資料の発見を待ちたい。関東地方以北では定形的な縦長剥片を素材とした基部加工のナイフ状石器が多く認められる。佐藤宏之〔1990〕はこの石器を「初期ナイフ形石器」と呼称している。当該地域は基部調整尖頭石器も比較的安定して認められることから、ナイフ状石器と台形様石器の影響を受けて基部調整尖頭器が作り出されたものであろう。そのことを傍証するように東北地方では秋田県蔵田遺跡〔安田・神田 2011〕、岩手県上萩森遺跡〔菊池 1998〕や風無台Ⅱ遺跡や松木台Ⅱ遺跡を含む七曲台遺跡群〔大野 1985〕などで豊富な基部調整尖頭石器が出土している。

⑧……………まとめ

台形様石器は始良 Tn 火山灰降灰以前の比較的早い時期に列島の広い範囲にわたって分布している。該期は環状にブロックが形成され、村落を形成されていた。その環状ブロックを構成する遺物に局部磨製石斧や台形様石器が顕著に出土している。

台形様石器を分析した結果、次の点が把握された。

1. 台形様石器の製作技術については①横長剥片のみならず縦長剥片を素材とした台形様石器がある。⁽⁶⁾②縦長剥片は切断手法により分割され、横長剥片は剥片を打面に直交するように切断して台形様石器の素材を作り出している。また石核は一定の位置に打面を持たず、交互に剥離して貝殻状の寸詰まりの横長剥片や寸詰まりの縦長剥片を作り出している。③台形様石器の一侧縁は剥片を剥離する時の打面調整や打縁調整を利用し、他縁は若干の加工をした例がみられる。両側縁は切断手法、平坦剥離、錯向剥離などを相互に駆使して作りだされている。
2. 台形様石器の石材は遠距離の黒曜石原産地から消費地に持ち込んで製作しているが、遺跡によって大きな差がある。北関東地方から下総台地にかけての台形様石器の石材は大きく変容している。①黒曜石が卓越した遺跡、②黒曜石と黒色安山岩を併用している遺跡、③安山岩製のみで構成された遺跡、④チャート・メノウが卓越した遺跡、⑤黒曜石を用いないで黒色安山岩、凝灰岩、黒色頁岩よりなる遺跡、⑥チャート製、黒曜石製の各1点を除いて全て黒色安山岩製で占められる遺跡など多様である。黒曜石原産地より黒色安山岩の原産地が近くに存在する点や隣接の常総台地にはメノウの産地があり、良質の石材を多面的に選択することができる地理的環境にある。また下総台地は珪質頁岩が全体的に卓越している遺跡が多いが、黒曜石製を主体とした遺跡も認められる。

相模野台地では出土例が少ないので今後の発見に待つべき点が多いが、B4層下部ないし中位では黒曜石が主でもありながらも多様な石材を有している。津久井城馬込地区では黒曜石がやや多く、次いで硬質細粒凝灰岩、珪質頁岩が続き、水晶など多様な材質の石材が台形様石器の用材として利用した遺跡もある。とりわけB4層上部では硬質頁岩の縦長剥片を分割して製作した大形の台形様石器が認められる。武蔵野台地では多摩蘭坂遺跡の事例からチャート製が目立つ。相模野台地は黒曜石を利用する遺跡もあるが、水晶製を若干含む遺跡も認められている。

3. 台形様石器の分類は6類に分類された。刃部は平刃ないし緩やかな斜刃で、逆三角形ないし方形を基本としている。基部は平基ないし尖基で構成される。このような台形様石器は北関東地方から下総台地にかけて多く出土している。千葉県草刈六之台遺跡では3層にわたって台形様石器が出土している。XI～X層がI類、IX層下部がI・III・IV類、IX層上部がI・III類が出土している。層を違えているがI類が認められ、IX層下部からX層上部でI・III層が組成している。他方東峰御幸畑西遺跡ではIX層下部でI・III・IV・V類の台形様石器が組み合わせとなることから、先の草刈六之台遺跡を通してみるとI・III類は欠かすことのできない台形様石器であったのであろう。

武蔵野台地では東京都高井戸遺跡X層がII類、IX層下部がV類、IX中層がII・V類で構成されるのでII類とV類はIX層で主体性があつたのであろう。また東京都武蔵台遺跡のXb層とXa層で台形様石器と推定される石器が出土している。Xb層はII型のみ、Xa層は加工が微細なので難しいがI・II・IV類よりなる。

相模野台地では吉岡遺跡群ではB5層がII・V類、B4層下部でIII類、B4層中部上位はV類、B3層下部上面ではI・V類・VI類よりなる。

X層上部ないしIX層中の台形様石器はI～V類の台形様石器がみられ、遺跡毎で組み合わせを異にしていたのであろう。II類はX層の古い時期に多いので古期に多く用いられたものであろう。

台形様石器の中で特筆すべきは草刈六之台遺跡（第8図7・8、第15図1・2）に代表されるI類であろう。平坦剥離による表裏面の加工を施している。同じような一群は群馬県今井見切塚遺跡33地点（第8図9・14）や同県大上遺跡（第8図3）にも類例が求められよう。III類は刃部が曲刃で、刃部幅は最大幅を呈す例が多い。刃部と身部交わる部分が角状を有する独特の形状を呈す。⁽⁷⁾

台形様石器の層位的出土例を見てきたが、各地域での地層や認識が異なるので、一概には言えないが、下総台地や相模野台地の出土例を同時期とするならば、台形様石器はXI～X（B5～L5）層の台形様石器が古期の段階からかなり多様であつたと考えられよう。そしてIX（B4）層になると各地域で多様な台形様石器が卓越していく。VII層になると、素材の関係からやや大形となり、限られた数量と形態からなる台形様石器が製作されていくものと思われる。

4. 先に、本州地方から九州地方にかけての尖状の先端部を持つ基部調整尖頭石器について分析した[白石2011・2012]。その結果台形様石器とは異なる一器種として分別できる結論を得た。基部調整尖頭石器は先端部と胴部との境に肩部を作り、胴部から基部にかけて加工を施したものである。尖頭部を有していることや九州地方ではあまり顕著とはいいがたく、縦長剥片を素材としたナイフ状石器が卓越する東日本から中国地方まで検出される。このことから基部加工のナイフ状石器と台形様石器が相互に影響して作り出されたものと考えられる。

かくて該期の台形様石器、基部調整尖頭石器、ナイフ状石器が次代の二側縁加工のナイフ形石器に収斂され、柳葉形の二側縁加工と切出形の二側縁加工の二種のナイフ形石器に変化していくのであろう。

5. 筆者は後出に位置づけられる長崎県百花台遺跡の台形石器について擦痕、刃こぼれ、折損の肉眼的な観察をしたことがある〔麻生・白石 1976〕。その結果、擦痕は刃部先端に縦位ないし斜位のガラス傷のようなミクロな痕跡、刃こぼれは刃線部に剥落のある例で、刃線一帯に剥落いたもの、限定した刃こぼれを観察した。折損は頭部折損や尾部折損があり、刃部に収束していることから直刃の⁽⁸⁾鎌と推定したことがある〔麻生・白石前掲〕。御堂島正は長野県立科F遺跡出土の台形様石器の使用痕分析を行い、刃縁に対して狭い範囲に平行の線状痕微小剥離痕が認められ、動物の皮を切る道具と推定された〔御堂島 1993〕。他方狩猟具であろうとする見方は既に佐藤宏之や鹿又喜隆等によって指摘されている〔佐藤前掲、鹿又 2005〕、狩猟活動に伴う台形様石器の補修（メンテナンス）の加工や再起不能で廃棄された事例、そして衝撃剥離や柄部を中心とした摩滅、輝斑、光沢などの着柄痕の観察から刺突具として使用され、結果として狩猟に用いられたものと捉えた〔鹿又 2005・2011、山岡前掲〕点は看過すべきではない。今まで漠然と狩猟具として推定していた台形様石器についても、台形様石器群の型式学的な研究や使用痕研究、実験考古学を通す中でより有意な説明が可能になろう。

おわりに

本稿は関東地方を中心として3万年前に最も卓越した旧石器時代台形様石器を中心として分析を試みた。とりわけ台形様石器の型式学的な検討を石材や層位的出土例を踏まえて始良 Tn 火山灰降灰以前の石器文化の様相を具体的に知ることができた。

謝辞

本稿は西本豊弘氏による科学研究費 A「霞ヶ浦沿岸花室川流域の旧石器文化の研究」の共同分担者としての成果として発表した論稿である。西本豊弘先生をはじめとして出居博・宇井義典・江本直・加部二生・川合剛・木崎康弘・工藤雄一郎・窪田恵一・小菅将夫・佐藤宏之・鈴木次郎・須藤隆司・砂田佳弘・永塚俊司・永井宏幸・新美倫子、西井幸雄・畠中俊明・久村貞男・比田井民子・前原豊、宮田栄二の各氏ならびに群馬県高崎市教育委員会文化財保護課、群馬県桐生市教育委員会文化財保護課新里分室、愛知県埋蔵文化財センターで報告書の授与、報告書の閲覧ならびに資料観察、そして何よりも適切なご教示をいただいた。記して感謝したい。

註

(1)——長崎県百花台遺跡出土の台形様石器は極めて定形的に製作されていることから百花台(Ⅱ)型台形石器と呼称された〔麻生・白石 1976、小田 1971〕。

(2)——須藤隆司氏は 2007 年に「日本後期旧石器時代の狩猟用石器—形態の範疇と型式的意義—」〔旧石器研究〕第3号に「基部加工・基部調整尖頭器」として藪塚系ナイフ形石器〔須藤 1991〕の意義を捉えた。

(3)——このような両側縁からの平坦剥離はまさに共伴

する局部磨製石斧の加工法に相通じる。なおこの点については「旧石器時代における局部磨製石斧の特徴とその意義—主として関東地方からみた局部磨製石斧の様相—」〔白石 2013〕と題した論稿で触れている。

(4)——筆者は台形様石器の出現の状況について B4 層や Xb 層よりさらに遡る例が東京都西之台遺跡 X 層〔小田 1980〕や神奈川県吉岡遺跡 D 区 B5 層〔白石・加藤 1996〕と考慮している。B5 層段階でも横長や縦長の剥片

を素材としているが、組織的に定形の剥片を用いたものとは言い難い。

(5)——筆者の指摘したウワダイラ型台形石器〔白石 1978〕を米ケ森技法〔奥村 1987, 麻柄 1995〕の中で理解されている。この点筆者は米ケ森技法を否定しないが、別の製作技術によって作られているものもあると考慮している。

(6)——百花台遺跡の台形様石器については素材となる縦長剥片を切断して1点の台形石器を得るのが精一杯だったのであろう。しかし当該期の台形様石器の素材は

中型の縦長剥片を素材していることから、分割により複数の台形様石器を作りえた蓋然性が高い。

(7)——このような刃部形態は後代の長崎県百花台遺跡〔小田 1971, 麻生・白石 1976〕にもみられる。

(8)——デンマークの中石器時代の諸遺跡で出土した台形石器は先端部に台形石器を装着して弓矢に用いて出土したことから直剪鎌と呼称されている〔大山 1931〕。年代の異なる台形様石器を台形石器のように用いられたものと確定するわけにはいかないが参考にはなる。

参考文献

- 麻生 優 1965「細石器文化」『日本の考古学Ⅰ』先土器時代 161～172 頁
- 麻生敏隆 1987『後田遺跡（旧石器編）—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書—』15
- 麻生 優・白石浩之 1976「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』3 48～54 頁 雄山閣
- 阿部 敬・岩名健太郎 2010『富士石遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 232
- 阿部 敬 2010「第4章旧石器時代の遺構と遺物」『富士石遺跡 第二東名No.42 地点 旧石器時代（AT 下位）編』47～328 頁
- 安蒜政雄 2013『旧石器時代人の知恵』新日本出版社
- 安斎正人 1997「台形様・ナイフ形石器群(1)」『先史考古学論集』6 79～115 頁
- 安斎正人 2000「台形様石器と台形石器—台形様・ナイフ形石器群(3)—」『九州旧石器—橘昌信先生還暦記念特集号—』4 53～70 頁
- 安斎正人 2004「台形様・ナイフ形石器群(2)」『先史考古学論集』9 1～28 頁
- 五十嵐一治 1998『家の下遺跡(2)旧石器時代編—県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—』秋田県文化財調査報告書 275
- 池谷信之 1998『土手上遺跡（d・e 区-2）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 64
- 池水寛治 1967「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』3-4 1～22 頁
- 池田朋生・江本 直 1999『石の本遺跡群Ⅱ—第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—』熊本県文化財調査報告 178
- 出居 博 2004『上林遺跡』佐野市埋蔵文化財調査報告書 30
- 伊藤恒彦 1987「(4)出土石器 第Ⅴ文化層（C 地区）」『中村遺跡』191～236 頁
- 伊藤徳広編 2008『原田遺跡(4)』第1分冊 285 頁
- 岩崎泰一 1986「第Ⅱ文化層の調査」『下触牛伏遺跡』78～148 頁（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岩崎泰一・石坂 茂・飯田陽一 1989「Ⅰ旧石器時代の遺構と遺物」『勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 87 2～254 頁
- 岩崎泰一 1988「AT 降灰前の石器群—県内出土石器群の分析—」『群馬の考古学創立十周年記念論集』11～30 頁
- 岩崎泰一 2007「Ⅱ調査の成果」『今井見切塚遺跡—旧石器時代編—』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 382 9～386 頁
- 岩崎新輔 2007「市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査報告書—平成 13～17 年度の調査報告及び上場遺跡発掘調査成果報告—」『出水市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)』
- 宇井義典・布施 仁 2004『千葉県成田市南三里塚宮原第1遺跡 南三里塚宮原第2遺跡』（財）印旛郡市文化財センター調査報告書 206
- 江本 直 1984「第Ⅲ章旧石器時代の調査」『曲野遺跡Ⅱ—一般国道3号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査報告（第Ⅲ次調査報告）—』熊本県文化財調査報告 65 21～90 頁
- 大塚昌彦・白石典之 1988「見立溜井遺跡」『群馬県史資料編Ⅰ』71～88 頁
- 大竹憲昭・須藤隆司・千葉 寛 1982「第Ⅳ章第4節 第Ⅸ層の石器文化」『下里本邑遺跡』74～80 頁
- 大竹憲昭 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 48

-
- 大野憲治 1984「第4章調査の成果第1節旧石器時代の遺物」『此掛沢Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書114 13～40頁
- 大塚宣明 2012「東北地方におけるナイフ形石器製作技術のはじまりと展開—秋田県域の資料を通して—」『駿台史学』145 51～78頁
- 大山 柏 1931「北欧に於ける中石器時代マグレモーリアン文化概説」『史前学雑誌』3-2・3 1～100頁
- 岡田誠造 1999『四街道市出口・鐘塚遺跡—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』(財)千葉県文化財センター
- 沖 憲明・山田繁樹編 2011『和知白鳥遺跡』
- 奥村吉信 1987「東日本のベン先形ナイフ形石器を伴う石器群」『旧石器考古学』35 27～36頁
- 小田静夫 1971「台形石器について」『物質文化』18 1～13頁
- 小田静夫・重住 豊編 1977『高井戸東遺跡』高井戸東遺跡調査会
- 小田静夫 1980「小金井市西之台遺跡B地点」東京都埋蔵文化財調査報告7
- 柿沼恵介・右島和夫・白石典之 1986『分郷八崎遺跡』北橋村教育委員会
- かながわ考古学財団 2003『吉岡遺跡群X』かながわ考古学財団調査報告153 281・378頁
- 鹿又喜隆 2005「東北地方後期旧石器時代初頭の石器製作技術と機能の研究—岩手県胆沢町上萩森Ⅱb文化層の分析を通して—」『宮城考古学』7 1～26頁
- 鹿又喜隆・傳田恵隆 2009「福島県笹山原 No.8 遺跡の機能研究」『第23回東北日本の旧石器を語る会予稿集』52～56頁
- 鹿又喜隆 2011「石器の空間分布における遺棄・廃棄行動の解釈とその妥当性の検討—岩手県上萩森遺跡における遺物の空間構造—」『旧石器考古学』74 61～76頁
- 鹿又喜隆 2011「附編3 石器の機能—地蔵田遺跡出土石器の機能研究と環状ブロック群形成の解釈」『秋田市地蔵田遺跡—旧石器時代編—』182～192頁
- 鎌木義昌 1957「香川県井島「遺跡」『石器時代』4～11頁
- 加部二生・阿久澤智和 2009「山内出B遺跡(群馬県)」『石器文化研究—岩宿発掘60周年記念—』15 75～78頁
- 加部二生 2010「Ⅱ桐生市山内出B遺跡」『桐生市内遺跡発掘調査報告平成19・20年度調査』10～22・90～92頁
- 加部二生 2005「山上城跡Ⅸ・石山Ⅱ遺跡」『2003年度調査新里村内遺跡発掘調査報告』群馬県勢多郡新里村教育委員会
- 軽部達也 1995『藤岡北遺跡』藤岡市教育委員会
- 川端結花 2009「柏市原山遺跡(千葉県)」『石器文化研究』15 61～66頁
- 川添和暁 2005「第3章 後期旧石器時代の遺構・遺物」『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告132 17～46頁
- 菊池強一 1998『上萩森遺跡調査報告書』朋沢町教育委員会
- 九州旧石器文化研究会 2009「九州における後期旧石器時代初頭の石器群を求めて」『九州旧石器』13
- 工藤雄一郎 2010「三旧石器時代研究における年代・古環境論」『講座日本の考古学1旧石器時代(上)』青木書店 124～155頁
- 工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性年代測定と考古学—』新泉社
- 栗島義明 1989「槍先形尖頭器の発生と展開—組み合わせ道具としての槍—」『中部高地の尖頭器文化』長野県考古学会誌59・60 280～290頁
- 小池 聡 2006「第3章旧石器時代の調査 第5節 第Ⅳ文化層」『都立武蔵野の森公園埋蔵文化財調査—野水遺跡第1地点—報告書』23～227頁
- 小菅将夫 1990「第Ⅲ章先土器時代の調査と藪塚遺跡出土のナイフ形石器」『群馬県新田郡藪塚本町藪塚遺跡台山地点発掘調査報告書』15～19頁 藪塚遺跡台山地点発掘調査団
- 小菅将夫・萩谷千明 2006『第42回企画展岩宿時代はどこまで遡れるか』岩宿博物館
- 小菅将夫 2010『第50回企画展群馬の岩宿時代』岩宿博物館
- 小林達雄・小田静夫他 1971「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-5 231～244頁
- 酒井弘志・戸谷敦司 2004「第2章旧石器時代」『千葉県本埜村瀧水寺裏遺跡』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書208 12～75頁
- 佐藤達夫 1964「無土器文化」『日本先史時代概説日本原始美術』1 講談社 137～140頁
- 佐藤宏之 1988「台形石器研究序論」『考古学雑誌』73-3 1～37頁 日本考古学会
- 佐藤宏之 1990「後期旧石器時代前半期石器群構造の発生と成立」『法政考古学』15～42頁
-

-
- 佐藤宏之 1991「東北日本の台形様石器」『研究論集』1～49頁 東京都埋蔵文化財センター
- 佐藤宏之 1992「Ⅲ-三 二極構造論の提唱」『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房 151～187頁
- 佐藤宏之 2003「北海道後期旧石器時代前半期の様相：細石刃文化期以前の石器群」『古代文化』55(4) 3～16頁
- 佐藤雅一・古谷雅彦・中村真理 2001『正面ヶ原D遺跡』津南町文化財調査報告書34
- 佐野勝宏・傳田恵隆・大場正善 2012「狩猟法同定のための投射実験研究(1)―台形様石器―」『旧石器研究』8 45～64頁
- 柴田亮平 2009「第3章 旧石器時代第3節 第Ⅱ文化層」『矢川上C遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告200 25～35頁
- 島立 桂 2003「第2章草刈遺跡C区・第2章草刈遺跡C区」『市原市草刈遺跡(東部地区旧石器時代)』千原台ニュータウンX 9～24頁
- 島立 珪 1994「第2章旧石器時代」『千原台ニュータウンⅥ―草刈六之台遺跡(第1分冊)―』千葉県文化財センター調査報告241 15～142頁
- 下川達彌 1975「長崎県日ノ岳遺跡の石器文化」『物質文化』25 21～36頁
- 白石典之 1987「分郷八崎遺跡の石器群をめぐる二・三の問題」『群馬県史研究』26 1～32頁
- 白石浩之 1973「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論」『物質文化』21 41～55頁
- 白石浩之 1978「西南日本におけるナイフ形石器終末期の予察」『神奈川考古』3 1～30頁
- 白石浩之・加藤千恵子 1996『吉岡遺跡群Ⅱ 旧石器時代1』かながわ考古学財団調査報告7
- 白石浩之 1995「関東地方におけるナイフ形石器文化終末期の様相―月期野期を中心として―」『古代文化』47―1 13～29頁
- 白石浩之 2010「旧石器時代後半期の槍先形狩猟具―組み合わせ道具からみた試論―」『旧石器研究』6 33～54頁 日本旧石器学会
- 白石浩之 2011「槍先形狩猟具の変化から狩猟文化を探る―1. 関東地方を中心とした岩宿Ⅰ期の狩猟具とその様相―」『神奈川考古』47 1～18頁
- 白石浩之 2012「槍先形狩猟具の変化から狩猟文化を探る―2. 狩猟具とその様相―」『神奈川考古』48 1～30頁
- 白石浩之 2013「旧石器時代における局部磨製石斧の特徴とその意義―主として関東地方からみた局部磨製石斧の様相―」『日本先史学考古学論集―市原壽文先生傘寿記念―』1～28頁
- 菅原俊行 1986「地蔵田B遺跡・旧石器時代」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』14-16
- 杉原荘介 1956「群馬県岩宿発見の石器文化」『明治大学文学部研究報告 考古学』第一冊
- 杉原荘介・戸沢充則 1971「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」『考古学集刊』4-4 1～28頁
- 鈴木次郎 2004「南関東の切出系ナイフ形石器」『古代』115 1～28頁
- 須藤隆司 1986「群馬県藪塚遺跡の石器文化」『明治大学考古学博物館館報』No.22 35～50頁
- 須藤隆司 1991「ナイフ形石器型式論(1)」『旧石器考古学』42 55～66頁
- 須藤隆司 2005「基部着柄尖頭具としてのナイフ形石器―東北日本後期旧石器時代前半期におけるナイフ形石器の形態論的考察―」『旧石器研究』1 57～72頁
- 須藤隆司 2007「日本後期旧石器時代の狩猟用石器―形態的範疇と型式的意義―」『旧石器研究』3 137～146頁
- 諏訪問 順 2003「南関東地方における立川ローム層基底部の石器群」『後期旧石器時代のはじまりを探る』日本旧石器学会第1回シンポジウム予稿集 42～52頁
- 関口博幸 1994「第3章白倉下原遺跡の旧石器時代調査」『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第161集・関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書』21 17～160頁
- 諏訪問 順 2003「南関東地方における立川ローム層基底部の石器群」『後期旧石器時代のはじまりを探る』日本旧石器学会第1回シンポジウム予稿集 42～52頁
- 関口博幸 1994「第3章旧石器時代の遺構と遺物」『天引狐崎遺跡Ⅰ―甘楽パーキングエリア地内遺跡の調査―旧石器時代編』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第161集・関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書21集
- 関口博幸編 2008『大上遺跡Ⅰ―旧石器時代編第1分冊(本文編)―』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書434
- 芹沢長介 1967「日本の旧石器(4)」『考古学ジャーナル』5 7～11頁
- 芹沢長介 1971「旧石器時代の諸問題」『考古学ジャーナル』53 2～12頁
- 芹沢長介 1977「磯山遺跡」『栃木県史 資料編・考古』114～121頁
- 芹沢長介編 1977『磯山遺跡』東北大学文学部考古学研究会
-

-
- 大工原 豊 1988「V遺構と遺物」『古城遺跡—安中古城住宅団地造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 館野 孝他 1980『多摩蘭坂遺跡』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
- 館野 孝・堀井晶子・砂田佳弘 1980『鈴木遺跡Ⅲ 小平市立鈴木小学校』
- 高尾好之 1989「第Ⅳ章 先土器時代の遺構と遺物」『中見代第Ⅰ遺跡調査報告書（足高尾上No.5遺跡）』沼津市文化財調査報告書45 19～159頁
- 高尾好之 1995「第Ⅰ期の石器群」『愛鷹・箱根山麓の旧石器編年』静岡県考古学会シンポジウムⅨ 15～21頁
- 竹岡俊樹 2003『旧石器時代の型式学』学生社
- 谷 和隆 2000『日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡』（本文編・図版編）長野県埋蔵文化財センター
- 田平祐一郎 1999『立切遺跡』『中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書』3
- 田村 隆 1986「第3章 中山新田Ⅰ遺跡 まとめ A先土器時代(1)編年」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター 112～181・441頁
- 田村 隆 1989「二項的モードの推移と巡回—東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相—」『先史考古学研究』2 1～52頁
- 田村 隆 2001「重層的二項性と交差変換—端部整形石器範疇の検出と東日本後期旧石器石器群の生成—」『先史考古学論集特集：構造変動』1～50頁
- 津島秀章 1999「第6章 第4文化層の石器群」『三和工業団地Ⅰ遺跡(1)—旧石器時代編—』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 58～244・246頁
- 東京都埋蔵文化財センター 2010『武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺跡（第1～3分冊）』東京都埋蔵文化財センター調査報告第239 319・333・350頁
- 戸沢充則・鶴丸俊明他 1983「第Ⅸ層の文化層」『多聞寺前遺跡Ⅱ』371～419頁
- 戸沢充則 1980「日本先土器時代研究の視点」『神奈川考古』8 1～10頁
- 富樫憲次・戸沢充則 1963「唐津周辺の細石器(Ⅲ)」『考古学手帳』18 2～4頁
- 直江康雄 2014「北海道における旧石器時代から縄文時代草創期に相当する石器群の年代と編年」『旧石器研究』10 23～39頁
- 中川和哉 1987「台形石器考」『旧石器考古学』35 37～52頁
- 中川和哉 2000「台形石器」『旧石器考古学辞典』93・94頁
- 中島庄一・中島英子・鶴田典昭 1997「「牛出古窯」「がまん淵遺跡」「一小布施町内 中野市内その1、その2—」』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24 326～335頁
- 中村雄紀 2014「関東地方における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』10 107～127頁
- 中村真理 2003「第Ⅲ章旧石器時代の調査—第1文化層—」『多摩蘭坂遺跡Ⅳ—東京都建物株式会社協同住宅建設に伴う事前調査—』18～99頁 国分寺市調査会
- 永塚俊司 2000「第2章旧石器時代」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—十余三稲荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）—』千葉県文化財センター調査報告第386 10～55頁
- 永塚俊司 2000「第2章旧石器時代第1文化層」『東峰御幸畑西遺跡（空港No.61遺跡）』新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 千葉県文化財センター調査報告385 23～310頁
- 永塚俊司 2004「第2章旧石器時代第1文化層」『東峰御幸畑東遺跡（空港No.62遺跡）』新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 千葉県文化財センター調査報告483 11～120頁
- 永塚俊司 2004『十余三稲荷峰遺跡（空港No.67遺跡）旧石器時代編』新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 千葉県文化財センター調査報告485 13～28頁
- 西井幸雄 2009「清河寺前原遺跡 2旧石器時代の遺構と遺物」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』366 18～222頁
- 新田浩三 2004「第3章 第1文化層の石器群の検討」『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』千葉県文化財センター調査報告504 304～333頁
- 橋本 正・上野 章・神保孝造 1974『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第二次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 畠中俊明 2010「第5章発見された遺構と遺物 7節旧石器時代」『津久井城馬込地区』かながわ考古学財団調査報告249 339～531頁
- 比田井民子 2004「東日本を中心とした後期旧石器時代初頭の小型剥片石器群」『古代』117 31～51頁
-

-
- 平井 勝 1979『野原遺跡群 早風 A 地点』岡山県埋蔵文化財調査報告 32
- 藤野次史 1990「Ⅲ鴻の巣遺跡の調査 2. 旧石器時代」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅷ』 15～32 頁
- 藤原紀敏 1983「台形石器」『日本考古学小辞典』ニューサイエンス社 199 頁
- 村崎孝宏・江本 直 1999「第Ⅲ章 A 地点の調査と成果」『耳切遺跡—小国地熱発電所計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』熊本県文化財調査報告 180 13～109 頁
- 三枝健二編 1982『地宋寺遺跡発掘調査報告—国道 261 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター
- 御堂島 正 1991「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』92 79～97 頁
- 御堂島 正 1993「立科 F 遺跡出土石器の使用痕分析」『立科 F 遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 5 82～92 頁
- 石島和夫・白石典之 1988「3 分郷八崎遺跡」『群馬県史資料編 1』 55～70 頁
- 宮田栄二 2007「市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査報告書」出水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (16)
- 麻柄一志 1995「立野ヶ原遺跡群とウワダイラ L 遺跡の再検討」『旧石器考古学』50 23～33 頁
- 麻柄一志 2006『日本海沿岸地域における旧石器時代の研究』雄山閣
- 三芳町教育委員会 2009『藤久保東第三遺跡第 4 地点発掘調査報告書』三芳町埋蔵文化財調査報告 34
- 明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 1969『神奈川県大和市月見野遺跡群調査概報』
- 若月省吾 1983「和田遺跡」『笠懸村誌』別巻 244～269 頁
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 1～30 頁
- 矢島 浩 2005「折茂Ⅲ遺跡 B 区旧石器時代の遺構と遺物」『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅸ—県営畑地帯総合土地改良事業長根台地地区発掘調査—』群馬県多野郡吉井町教育委員会 53～87 頁
- 安田忠市・神田和彦 2011『秋田市地蔵田遺跡—旧石器時代編—』秋田市教育委員会
- 柳田俊雄 1995「会津笹山原遺跡の旧石器時代石器群の研究—石刃技法を主体とする石器群を中心に—」『郡山女子大学紀要』31 1～227 頁
- 山岡拓也 2006「武蔵野台地における後期旧石器時代前半期石器群の変遷」『古代文化』58 107～125 頁
- 山岡拓也 2010「台形様石器」の欠損資料：日本列島の後期旧石器時代前半期における現代人的行動の事例『旧石器研究』6 17～32 頁
- 山岡拓也 2012「道具始源利用に関する人類の行動的現代性—武蔵野台地の後期旧石器時代前半期資料の含意—」『旧石器研究』8 91～104 頁
- 矢本節郎・横山 仁 1997『天神峰奥之台遺跡（空港№ 65 遺跡）』新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 X
- 矢本節郎・横山 仁 1997『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告 X—天神峰奥之台遺跡（空港№ 65 遺跡）—』（財）千葉県文化財センター
- 山本 誠 2004「第 4 章七日市遺跡第Ⅱ文化層の遺構と遺物」『兵庫県氷上郡春日町七日市遺跡（Ⅲ）旧石器時代の調査』兵庫県文化財調査報告 272 58～82 頁
- 吉崎昌一・横山英介・直井孝一・石橋孝夫 1974『祝梅三角山地点—北海道千歳市祝梅における旧石器時代遺跡の発掘調査』千歳市教育委員会
- 吉田英敏・橋詰佳治・沢田伊一郎 1987『寺田・日野 1 —一般国道 156 号岐阜東バイパス建設に伴う緊急発掘調査—』岐阜市文化財報告 1987-1
- 和島誠一・麻生 優 1963「島原半島百花台遺跡の調査」『日本考古学協会昭和 38 年度大会研究発表要旨』 4・5 頁

（愛知学院大学文学部，科学研究費助成事業研究協力者）

（2016 年 1 月 7 日受付，2016 年 8 月 1 日審査終了）

Prospects of the Old Stone Artifacts and Hunting Tools in the Kantō Area : Focusing Mainly on Trapezoid Tools

SHIRAISHI Hiroyuki

This paper reviews the study of trapezoid stone tools. This were also referred in the Proem for Study of Trapeze-shaped Tools by Hiroyuki Sato, It was expected that stone artifacts before Aira-Tn ash fall would be elucidated. Since then, 28 years have passed, and trapezoid tools have been found at various archaeological sites across Japan. Especially, those unearthed in the Kantō region have yielded data as a result of stratigraphical and typological analysis. In addition, the analysis of traces of use, as well as experimental research, has progressed, enabling a more profound examination of the functions and applications of trapezoid tools.

This paper reviews the studies of trapezoid tools of the above-mentioned age from the perspective of typology.

Although past studies focused on trapezoid tools made mainly of wide flakes, those made of elongated flakes are too important to overlook. Backed points, also known as pen-point-knife-shaped tools, have been found mainly in eastern Japan and occasionally in the Kyūshū region. Because of its shape, pointed at one end and shaped at the other, this type of stone tool is assumed to have been independently developed by interactions between knife-shaped tools and trapezoid tools.

In order to make trapezoid tools, stones were processed and then cut into trapezoidal pieces, and the side edges of the blade part were shaped and knapped to provide flat surfaces, especially disoriented surfaces. Trapezoid tools are categorized into six types: ① those with a horizontal blade and a pointed butt; ② those with a horizontal blade and a flat butt; ③ those with a horizontal blade, a flat butt, and sharp corners at the blade tip (shaped like a trapezoid with its width increasing toward the blade tip); ④ those with an angled blade and a pointed butt; ⑤ those with an angled blade and a flat butt; and ⑥ those made of elongated flakes knapped on the edges.

Trapezoid tools have been excavated in the Kantō region from the Layers of Sagamino B5 and lower Musashino X at the deepest level, which means they are among the oldest stone tools of Tachikawa loam formation. Trapezoid tools are most common among those unearthed from the Layer of B4 and the Layers from upper X to IX. Most of these trapezoid tools are classified as Types I to V. The newest trapezoid tools have been unearthed from the black band Layer of Sagamino B3 and the Layer of Musashino VII. Most of them are classified as Type VI (those made of elongated

flakes cut and shaped on the side edges). In the northern Kantō region, the materials of trapezoid tools are different at each archaeological site. This suggests that there were regional differences. The trapezoid tool culture reached its zenith before the rise of the knife-shaped tool culture represented by tools shaped on both side edges and excavated mainly from Layer VII.

Key words: Trapezoid tools, backed points, knife-shaped tools, cutting method, knapping to provide flat surfaces, knapping to provide disoriented surfaces, typology